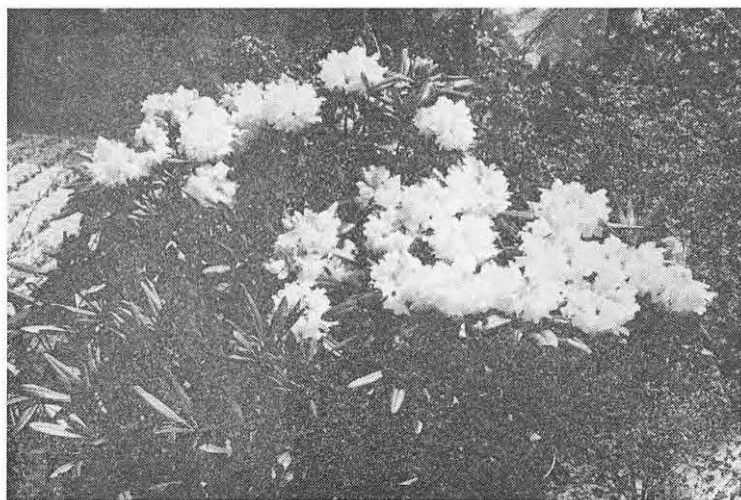


第一編  
自然



シヤクナゲ



## 第一章 黒川溪の歌碑が象徴する柳谷の自然

わがやなだにの自然。自らが黙々と創り出したひろげに、やなだにびとはじめ、すべてのものの共存を認め、それらのものとの和やかさを保ちつづけている。その喚びかけには、何一つかざりけもなく、むなしさもない。ただ、すばらしいたずまいの日々である。しかしわれわれには、それを視止め、それに聴き欲れて、うたいあげる感動のさけびが育たなかった。まことに慣れにあまえきつた永い過去であった。

昭和五六（一九八一）年一月三日文化の日。落出から国道四四〇号線を西南すること五キロばかり、「シモオオタニ」とよびきたつた国道沿いに、「黒川溪歌碑」は除幕された。やなだに郷びらきしてこのかたの、はれやかな日記の一文である。

歌碑はこう言いきつている。「黒川溪蒼き樹林の底ふかく ものいのちを見せてゆく水」と。われわれやなだにびとの胸に、一すじの清風が吹き抜けて、霧こめたもどかしさは晴れた。歌碑建立の共感をよびあったのである。

この日に先だつ五四年の夏だつたとか。黒川溪の峽を訪ねた在京の歌人逗子八郎（本名井上司朗 ニッポン放送社員）は、くろかわの流れの音なひにいなわれ、蒼き樹林の語らひにまな差しして、いのちの共感よびあう旅の一日を楽しんだとか、ときく。



黒川溪歌碑全景

## 第二章 いのちの讃歌

黒川溪歌碑の除幕式に来村した歌人は、カルスト高原・八釜溪を探勝した。その探勝感懐を、後日、『月刊時事』の昭和五七年四月号に、「伊予国柳谷村紀行」の題名で述べている。わが村の自然との融け合いの深さに、我々は畏敬するばかりである。いのちの讃歌と題して転載する。

(五四―七一三) 四国カルスト草地開発牧道未完成分一キロ二〇〇メートルに就て、裁決のため天狗高原に一泊する。七一三一  
面河に向って黒川溪谷を下る道すがら詠んだ歌)

黒川溪蒼き樹林の底ふかくものいのちを見せてゆく水

柳谷のきよき川瀬に村の子ら水あそぶ見れば吾孫しおもほゆ

黒川溪は日向なぞえに家むつび裏山なべて深き植林

柳谷村八釜の瀬瀬をたぎりゆくV字の溪をまたいつか見む

(五六―一一二午後、大川峰の頂上で、)

命いきて伊予大川嶺のいただきの雲の上なる高野原に立つ

このいのちいかにせよとか雨すぎし大川嶺の頂の夕やけのくも

大川嶺の尾根は高野原谷々のいのちやしなひて空につらなる

中津明神岳をとぎせし雨後の雲ちりて夕日まともなり大ぎ山体

天地は大いなるかなや四国山脈もただ一つ褶曲ぞ秋ぞらのもと  
(五六―一―三除幕式後、八釜溪谷に下り立ちて、)

黒川溪の紅葉は溶けて空ほそき峡の水ふむ頬もあかるし  
たちまちに峡のゆく手を岩とざしのりこゆる水のいのちとどろく

黒川溪に小黒谷の滝つき入りてその落ち合ひの万壑の雷

轟きて釜に入る滝わきかへりあふれて次の釜におちゆく

さかのぼる支谷小黒溪紅葉わけおちくる枝沢ことごとく滝

(柳谷の自然のいのちに対する、柳谷びとの鋭い直観、と称えて、)

植林に発電に自然生かしつつ柳谷村はこころゆたけし

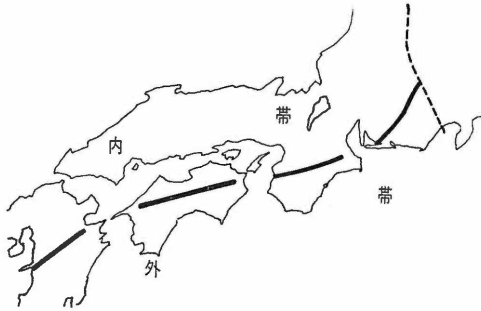
## 第三章 やなだにの自然の生い立ち

やなだにの自然は生きている。そして、われわれはじめ、すべて生きもののいのちとの関わりは深い。われわれは、われわれとのかかわり深い、やなだにの自然の生い立ちがたずねたくなる。柳谷の自然は、どんな生活史をもっているのか。それは、気の遠くなるほど古くて、遠くて、大いなることがらであろう。一本すじのようなものではないであろう。どの一点からなどと定めることは、なかなかむつかしいことではある。だが我々が自分の系譜を、今の自分からさかのぼって考えているように、その考え方を流用してみてはどうだろう。

ただ今の我々に相当する柳谷の自然とは、日ごろ我々がこの眼で捉えている、山なみ・谷すじ・傾斜面が組みあつた、彫りものさながらの地塊である。この大いなる地塊は、内に大いなるいのちを秘め、大いなるいのちの営みを、絶間なくみせ続けている生きものと感じさせる。この地塊がいのちの固まりらしく見せ始めた一点を、「自然の誕生日」と定めてみよう。その日、今から凡そ一〇〇〇万年ぐらい前だといわれる。ずいぶん古いできごとなのだ。柳谷の自然の年齢を一応、一〇〇〇万年歳としよう。

この地塊のいのちは、宇宙と呼ばれる胎内ですばらしい生長活動を積み重ねてきた。この地塊を、ある広がりとする厚さをもった「餅とり板に載せたつきたての餅の塊」と考えてはどうだろう。この「餅とり板に載せたつきたての餅の塊」のような地塊が、一応まとまるまでに、いのちの分身といのちの合身が、くりかえされたであろう。この地

第1図 西南日本中央構造帯



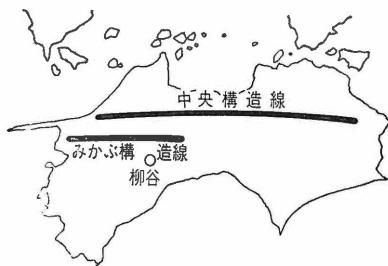
塊の生長活動を、生物が細胞分裂してからだができあがるように類すると、想像してもよいであろう。まず連想できる地層をいのちの要素だと考えると、その二層・三層・数層の地層の分合活動の末、一つの地塊にまとまったとされている。ちょうどむした餅米の一粒一粒がとけ合って、一塊りの餅となったように。そのうち一番深い地層（地塊のいのちの中心とでも言えるもの）と見られるものができていたのは、凡そ二億年も前だろうと言われている。

それ以来、二億年ほどの胎内（宇宙）での生長活動は、複雑多様であったようだ。それはちょうど、胎児が胎内で育ってゆく複雑さ、微妙さにも類する。海底深いところまでできた層が盛り上ったり、地上でながく経過した層が落ち込み沈んでいったり、傾いていったりした。層が重なりあい、もつれあい、ねじれあい、火山活動のようなはげしい力の噴き出しが、くりかえされていった。ものの生成ということは、いかに「ただならぬもの」であることか。学者は、このいのちのできあがるはげしい活動を、「地殻運動」とか、「造山運動」とか名づけている。

では「柳谷の自然の系譜」を、その古い地殻運動史の記事から覗いて見ることにしよう。

- (一) 四〇〇〇万年ほど前—西南日本に中央構造体ができ、西南日本は内帯・外帯に分かれる。わが柳谷の地塊は、外帯系に属することになる。構造線は、木曾・赤石山塊……和歌山紀伊山塊……四国剣山山塊↓四国石鎚山山塊↓四国佐田岬北縁……九州山塊と走向している。
- (二) それから一〇〇〇〇万年前までの間に四国に、
- (イ) 「みかぶ構造線」と名づけられるものが、中央構造線に略平行（東西方向）

第2図 みかぶ構造線



(三) 等々の断層線が走っている。  
四国カルスト準平原のもり上り(隆起)——この四国カルスト準平原の隆起は、柳谷地形の個性づけに、大きい意味をもっているのである。

にでき、外系の分系が行われた。わが柳谷の地塊は、南の塊(上部古生層)の一角に再分系となる。みかぶ構造線は、美川東川境野↓父二峰橋詰↓大洲盆地↓八幡浜(宇和海)と走っている。

(四) わが柳谷地塊内に、略北西から南東に走る断層線ができた。

○ 御三戸↓龍宮↓奈良籤……鳥形山塊(鉢・洞門にかけての地盤の軟弱さは、断層線との関わりはないだろうか)。

○ 狼が城↓横野

○ 小田深山↓丸石山↓地芳峠。

○ 中津時戸(小松谷川合流点)から予土県境脊梁に沿って↓正木が森。



## 第四章 大いなる柳谷地塊

### 第一節 盤体が刻まれて彫りもののすがたになる

わが柳谷の地塊は、最東端が東径一三三度〇分、最西端が東径一三二度五三分五六秒、最南端が北緯三二度二七分三七秒、最北端北緯三三度三四分二六秒の区域内に位置している。四国の島のほぼ中央部で高知県と境を接し、二県（愛媛・高知）、四郡（上浮穴・東宇和・高岡・吾川）、七か町村（美川村・小田町・野村町・榑原町・東津野村・仁淀村・吾川村）と地つづきし、いのち通わせあう大いなるいきもののすがたを見せている。

わが柳谷地塊体の大きさを見よう。北東端中津山（一五四一メートル）、北西端大川嶺（一五二五メートル）、南東端天狗高原（一四八五メートル）、南西端姫草（一三〇〇メートル）。この四点を結ぶと、ほぼ整った平行四辺形となる。四辺の長さ約一一・五キロ、一一・四キロ、一一・〇キロ、一〇・七五キロであるから、ほとんど菱形に近い。対角線長さ約一七・八五キロ、一二・五キロは、大字西谷大成あたりで交わることとなる。

今日の総面積、一二六一〇ヘクタールで、その用地別内訳は、

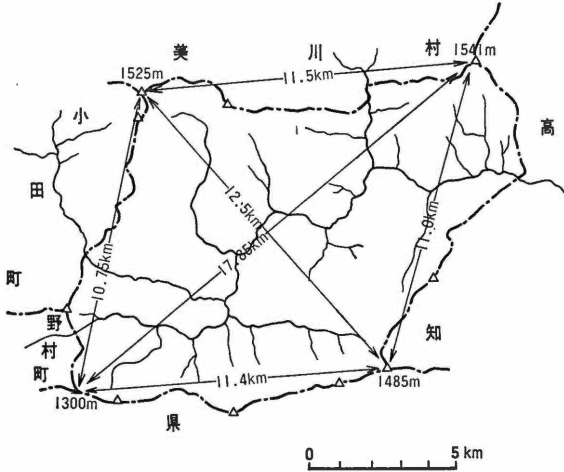
田	六七ヘクタール。	畑	五四ヘクタール。	樹園地	五八ヘクタール。	採草放牧地	二三
一ヘクタール、	小計	農用地	四〇〇ヘクタール。	山林	一一五〇八ヘクタール。	宅地等	

三四ヘクタール。 その他 六六八ヘクタール。

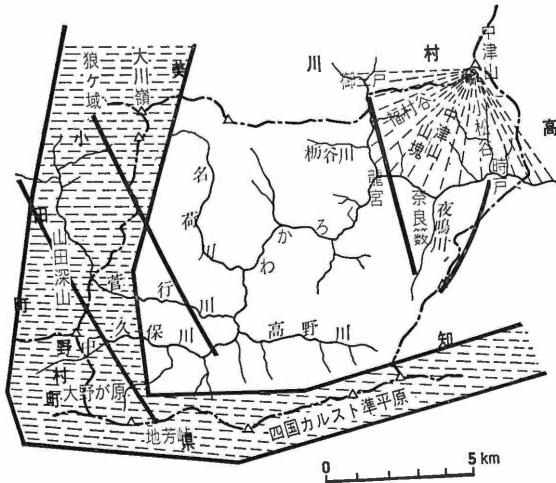
となっており、山林が九一・二パーセントを占めている。

今仮りに、この今日の地表面ができる浸蝕活動が始まる前に、造山活動がおさまって、厚さ何千メートルもある柳谷の原地塊が仕上がっていたと考えると、そのすがたは、搦ぎあげられた大きい菱形化した餅の塊が、あたかも上天に供えられているかのように見えたであろう。

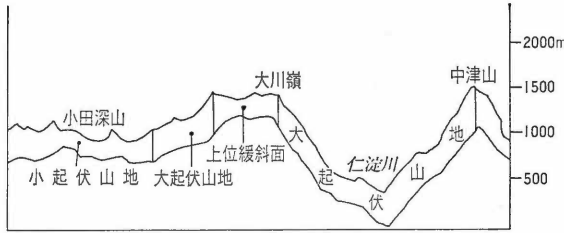
第3図 平行四辺形の柳谷地塊図



第4図 柳谷村における断層線・地塊図



第5図 起伏断面図



## 第二節 中津山塊と四国カルスト準平原

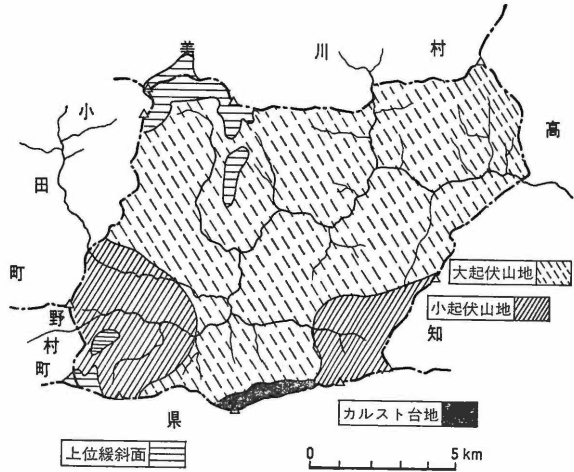
今日我らの眼に映る柳谷の自然体は、厚さ二〇〇〇メートル内外の、平行四辺形のものではない。地塊として誕生後、起ったであろうと思われる隆起や沈降などがつづきながら、絶えず浸蝕や風化がつづいたであろう。そして彫刻のような地塊は、山なみ・谷すじ・斜面などが一つづきに連なりあっている。全く一つづきのひだのつくりものとなっている。平行四辺形のどの頂点に立つて見ても、村ざかいの稜線のどの点に立つて見ても、山なみ・谷すじ・斜面が織りあつた彫刻の彫りは、柳谷の自然体の個性をはつきりと示している。

我らのからだは、頭・胴・手足の連なりであるように、柳谷の地塊もまた、いくつかの部分の連なりで、ただ一つの褶曲ひだとなつてゐる。仁淀川を界して、二つの部分が連なつてゐるようだ。一つは中津山を頂点とする中津山塊、一つは、西部から南部に亘つて長く続く、四国カルスト準平原体（高原部）と、それから出た稜線の群れとである。

中津山塊は、中津山を頂点とした円錐体の西南四半体で、底面の四半分の円周が仁淀川底線をなしており、四半円錐の二つの切断線が、美川・吾川両村との村ざかい線をなしている。

一方四国カルスト準平原体は、それぞれの走向に直角に、東方あるいは北方に、たくさん稜線を出しており、それら稜線の末端が、黒川及び仁淀川の本流の谷底にそれぞれ

第6図 地形分類図



れ下りている。この四国カルスト準平原体は、剣山山塊・石鎚山塊と共に、四国地塊の三大尾根と呼ばれ、それから出ている稜線の群れと織りあつて、大起伏山地を刻み出しているのである。柳谷の地形は「壮年期」といわれる。二つに区分されている山塊の起伏状態について、その壮年性を考えてみよう。

(一) 大起伏山地―起伏量が六〇〇メートル以上の山地区。標高は七〇〇メートルから二〇〇〇メートル級。壮年性高山群が競いあい、いずれも二五度から七〇度の急斜面にとりまかれている。斜面には河蝕・雨蝕・風蝕・重力浸蝕などが、さまざまな速度で進行中である。この山地区は一〇〇・五四平方キロ(七九・二九パーセント)である。

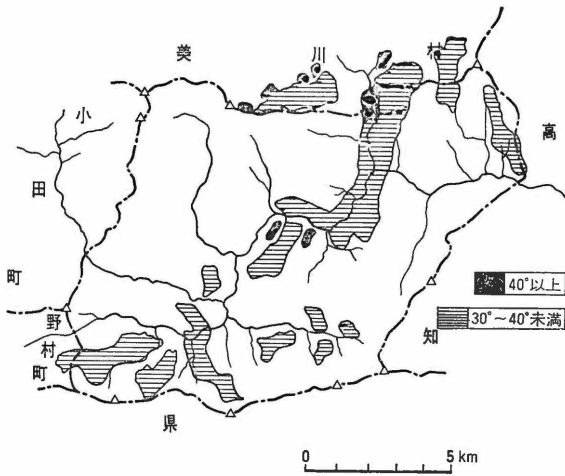
(二) 上位緩斜面―標高一四〇〇メートルから一七〇〇メートル級の緩斜面。傾斜は五度から一五度級。稜線附近にあつて、周囲の急斜面とは明瞭に、傾斜変遷面で接する。大野が原・大川嶺・姫草・地芳峠・姫鶴平。

(三) 小起伏山地―起伏量が二〇〇メートルから四〇〇メートルまでの山地区。南東部山地区・南西部山地区。

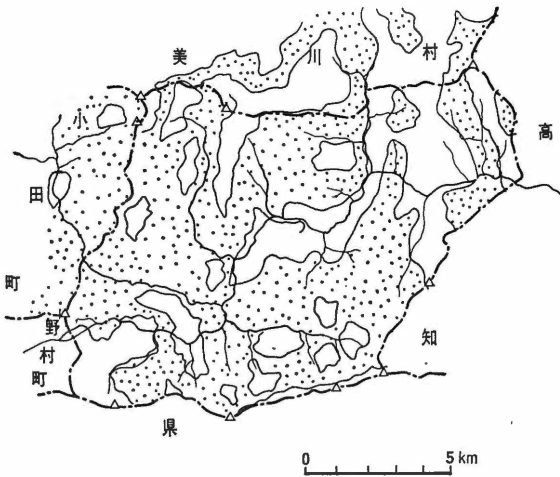
(四) カルスト地形―石灰岩からなる台状地形。地表は無数のカーレンや、大小のドリーネ・ウバーレなどで凹凸のある特異の溶蝕地形を示す。

つぎに傾斜度による区分図をつくり、その分布状況をみよう。三〇度以上の傾斜分布は、中津山々塊の御三戸く

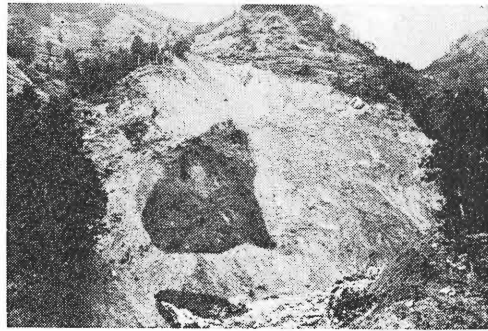
第7図 傾斜度 30° 以上分布図



第8図 傾斜度20°以上30°未満分布図



奈良数断層線と、黒川の本流に沿って連続している。仁淀川は御三戸く奈良数断層線に沿い、仁淀川の横谷部分（中央構造線・みかぶ構造線の走向に直交して流れる）として浸蝕活動を続けてきた。中津山頂から五段高原に連なる石鎚山系の支脈と、さきの断層線に挟まれた地塊胴体が薄く、仁淀川の浸蝕深く、今日の稲村・鉢・磯が成の急斜面を刻み出している。龍宮からアカゴに至る横谷・小黒川山地区は、黒川の強大な浸蝕活動と、横谷小黒川ブロックの岩壁との関係で、三〇度以上の壮年期の相を見せている。黒川の源流に近く急斜面の点在するのは、四国カルスト準平原の

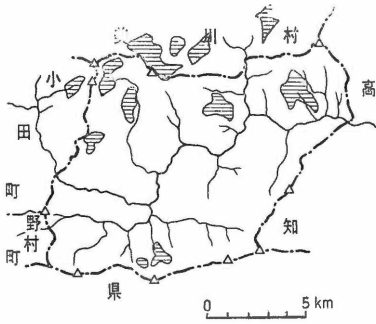


山くずれ→栃谷氾濫

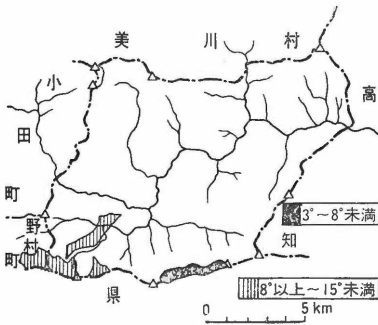
隆起後の浸蝕で、カルストから出た稜線地域に、それぞれ急傾斜を刻み出したものであろう。三〇度以上の傾斜度分布のうち、四〇度以上は二・五八平方キロ(二・一〇三パーセント)、三〇度以上四〇度未満は、二九・八四平方キロ(三・五三パーセント)である。二〇度以上三〇度未満の傾斜地は、柳谷地表の大部分を占めている。(七六・一四平方キロ六〇・〇五パーセント)。からだの健康さをあらわに見せる肌色と言えよう。上位緩斜地(大川嶺台地・姫鶴平・姫草平・五段高原等)の特別地以外は、集落が生れ育つ恰好の土地であらう。わが村の三一集落の傾斜度を見よう。大字柳井川―立野二二度・松木大窪谷一八度・川前二二度・永野一四度・高地三二度・百が市三九度・奈良藪二四度・落出(役場地区三三度・センター地区三三度・広瀬地区二九度)、鉢(磯が成)二六度・稲村二六度。大字西谷―郷角二四度・本谷二二度・小村二二度・名荷下三〇度・名荷上二九度・古味二六度・横野二六度・川口二九度・高野三五度・大成二七度・猪伏二七度・中久保二八度・中畑二八度・菅行二九度。大字中津―岩川二七度・中田く窪田く西村一八度・休場一四度・旭一八度・川之内三〇度。二〇度未満の傾斜地は、一五度以上二〇度未満が一・五八平方キロで九・九二パーセント、八度以上一五度未満が四・六八平方キロで三・六九パーセント、三度以上八度未満が〇・九七平方キロで〇・七六パーセント(姫鶴平の極緩斜面)である。

次に標高をいくつかに区分してみる。県境の面河川底を二四〇メートルとして、最低のランクを標高二〇〇メートル以上四〇〇メートル未満とする。このランクは、仁淀川全流と黒川八釜溪迄の兩岸を含む。旭・川之内はじめ中津

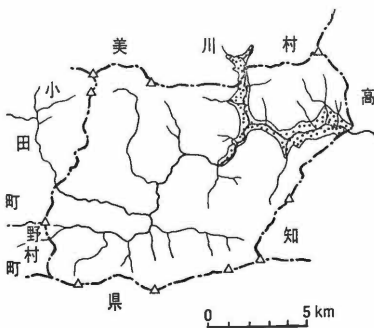
第9図 傾斜度15°以上20°未満分布図



第10図 傾斜度3°以上15°未満分布図

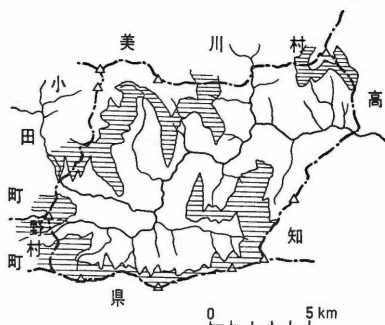


第11図 標高200m~400m区分図

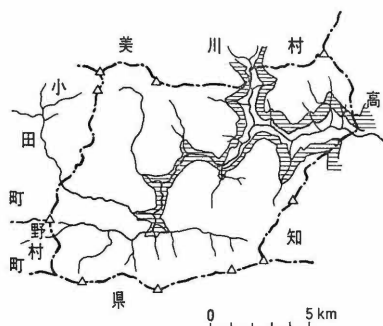


はほとんど、落出・磯が成・川前の一部などの集落はこの区域に入る。広さ六・九四平方キロで、柳谷全域の五・四七パーセントに当る。次の四〇〇メートル以上六〇〇メートル未満のランクでは、黒川は横野まで遡る。前のランク以外の集落は大部分之に入る。広さ一三・四四平方キロ、比率一〇・六である。第三のランク六〇〇メートル以上八〇〇メートル未満の区域になると、黒川の数多の支流もその中流に及び、残る集落もみな含まれる。広さ二五・八七平方キロ、比率二〇・四パーセントを占める。つぎの八〇〇メートル以上一〇〇〇メートル未満の区分は、三極植栽最盛期には、大きいはたらきを現わした区域と思われ、面積三七平方キロ、村全域の三分の一に近い二九・一八パーセントである。一〇〇〇メートルを超え一二五〇メートル未満となると、上位緩斜面も包含され、今日の林地造成に、華々しい増反貢献した区域と見られ、三四・六八平方キロ、二七・三五パーセントの数値を示している。頂上部に迫る一二五〇メートル以上一五〇〇メートル未満の区分は、八・三平方キロで六・五四パーセント。頂上部一五〇

第15図 標高1000m~1250m区分図

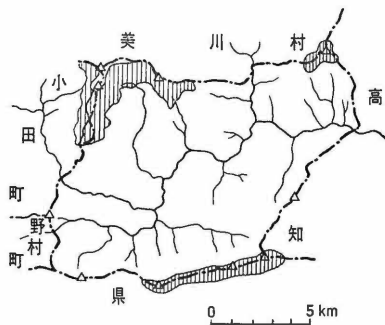


第12図 標高400m~600m区分図

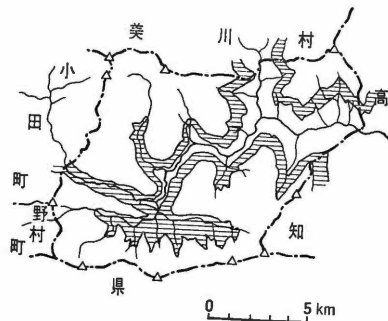


第一編 自然

第16図 標高1250m~1500m区分図



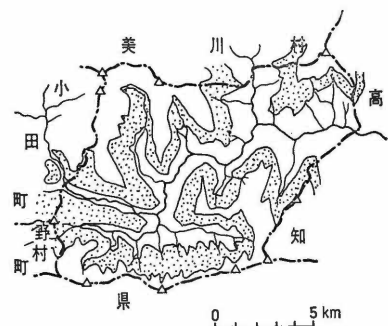
第13図 標高600m~800m区分図



第17図 標高1500m以上区分図



第14図 標高800m~1000m区分図





○メートル以上山地は、○・五六平方キロで○・四四パーセントである。

以上の傾斜区分・標高区分から、柳谷地塊の特色（自然の個性とも思われるもの）をまとめてみる。わが国の海岸地帯で、海岸に幅狭い平地と、海岸線に平行して迫る断層面がある地域の断面を、ちょうど逆転した傾斜体と言えないだろうか。北条市海岸の带状平地↓立岩川↓高縄山頂（九八六メートル）のコースに、黒川の流向が相似している。

## 第五章 柳谷地塊（自然）のちから

### 第一節 岩石と土壤

土壤は地塊を形成している岩石が、崩壊し、分解してできた母材に、ある生命力がはたらいて生じた、彫刻体の最上部をなしているもの、それが土とも大地とも呼ばれる土壤である。我々柳谷びとと和み合い、いのちを感応し合ひ、生ける証しを通じ合ひ、最も親密な相手である。

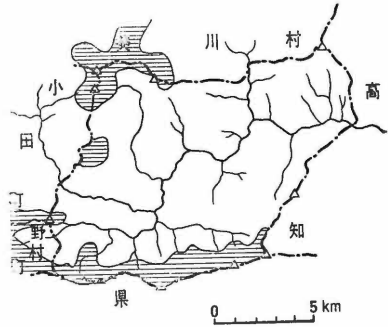
#### 土壤の生成

我々のからだの皮膚筋肉が一樣でないように、柳谷彫刻体の最上部をなしている岩石片、土壤も一樣ではない。からだの皮膚・筋肉は、体内へとり入れられた諸々の栄養要素が、その母材となつて、内臓諸器官の秩序あるはたらきを経てつくり出される。岩片・土壤も亦、岩体から岩石片へ崩壊（風化）し、そして土壤母材に崩分解する。土壤母材はさらに、微生物の着生や植物生成などの助成作用を受けて、土壤化作用を進め、「自然土壤」に転生するのである。「断片・偶然・謎」として、無関心の淵に葬り去りがちのこの一過程にも、なるべくして成る自然のはたらきの秩序が何がえないだろうか。

#### 土壤の分類

その一は粒子の大きさによる。直径二ミリ以上を礫、二ミリ以下〇・一ミリ以上を粗砂、〇・一ミリ以下〇・〇二五ミリまでを細砂、〇・〇二五ミリ以下〇・〇一ミリまでを微砂、そして〇・〇一ミリ以下を粘土と呼ぶ。その二は、粘土の含量による。

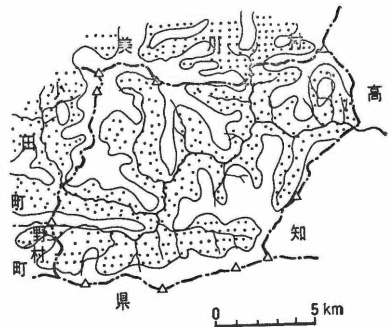
第18図 黒ボク土壌分布図



第19図 淡黄色黒ボク土壌分布図



第20図 褐色森林土壌分布図

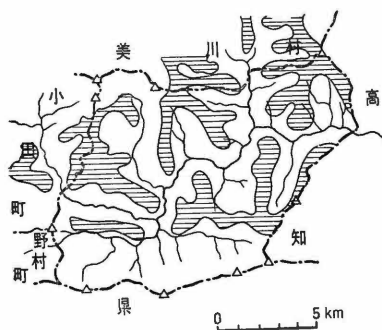


粘土五〇パーセント以上を植土、五〇以下三七・五パーセントまでを植壤土、三七・五以下二五パーセントまでを砂壤土、二五以下一二・五パーセントまでを砂土、一二・五パーセント以下を砂土と名づける。

わが村の土壌を六分類し、夫々の分布状態を区分図示する。(1) 黒ボク土壌—主要稜線上の緩斜地やくぼ地に分布している。火山灰を母材とする土壌で、黒色のA層は腐植に富み、二五センチ以上ある。

B層との境は比較的判然としているが、木材の成長はよい。四国カルスト高原に分布している。広さ一九・五八平方キロ、全面積比一五・四四パーセントである。(2) 淡黄色黒ボク土壌—主要稜線上の緩斜地・くぼ地に分布し、A(B)C断面をもつ土壌で、火山灰を母材としている。黒色又は黒褐色のA層は、一五センチないし二五センチぐらいで比較的浅く、明黄褐又は灰褐のB層との境は、明瞭である。PHは中性に近いが、置換酸度は大きく、置換石灰量はごく小さい。林木の成長一般によくない。中津圏域小松谷上流右岸と、明野野谷上流に挟まれた八五六メートル稜線中心

第21図 乾性褐色森林土壌分布図



第22図 湿性褐色森林土壌分布図

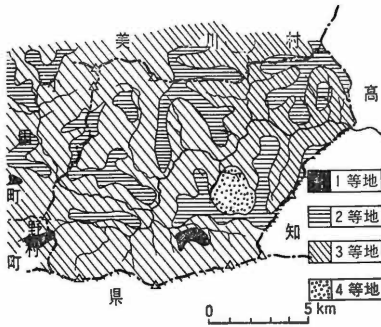


第23図 岩屑性土壌分布図

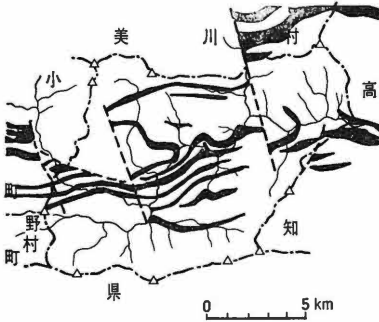


に分布する。広さ一・二八平方キロ(一・〇パーセント)である。(3) 褐色森林土壌—斜面の下部や緩斜地等、適潤な水分をもつ環境下に分布し、腐植に富んだ膨軟な厚いA層からB層に漸変している。面積七三・六八平方キロ(全村の半ば以上五八・一一パーセント)である。(4) 乾性褐色森林土壌—標高三〇〇メートル以上の主要稜線及びこれから派生した尾根筋に分布する。(イ) 中津山山塊—一三六メートル頂より、七五〇メートル頂及び七四八メートル頂へかけて。(ロ) 仁淀村と村境脊梁一〇四九・五メートル頂中心として。(ハ) 正木が森頂より一三三六メートル頂へ、更に八八八メートル頂(高地)及び一二四〇メートル頂へ、後者は更に、八〇〇メートル頂(小黒川)と九一四メートル頂(古味)へ。(ニ) 丸石山頂より、一二二二メートル頂へ、更に一〇三九メートル頂(中久保)へ。(ホ) 水なし山南西一三六〇メートル頂より、南東に延びて滝野へ。(ヘ) 水なし山頂より北東・東・西方へ脊梁を追って。(ト) 美川村境脊梁中、一四九一メートル頂より大成へ、一三九一メートル頂より七八七メートル(永野)へ、東下して七五六メートル頂(立野)へ。A層の発達はよわくて浅く、B層は腐植乏しいか含まない。この土壌の

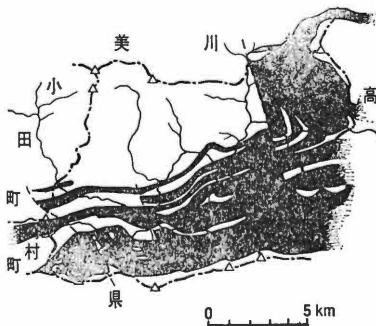
第24図 土地等級分布図



第25図 チャート分布図

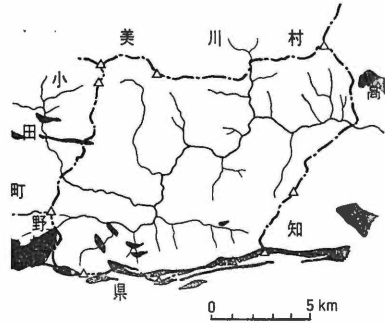


第26図 砂岩粘板岩互層分布図

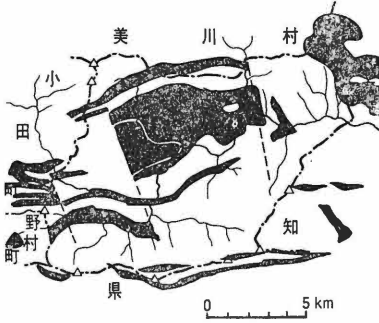


広さ二七・四四平方キロ(二一・六四パーセント)である。(5) 湿性褐色森林土壌(斜面下部や谷底・谷間の緩斜地など、水分が集つてくるところに分布している。A層は黒褐色、暗褐色で腐植にとみ、褐灰色のB層に漸変している。高野の向かいの斜面(九〇六メートル頂と一〇〇六メートル頂を含める斜面)と、中久保川左岸、郡境に一部含まれ、西方碁石が森附近へ延びる。この土壌広さ一・二八平方キロ(一・〇〇パーセント)である。(6) 岩屑土(岩屑性土壌)主として森林限界以上に分布し、A(B)C断面をもつ土壌で、暗褐色のA層はあまり発達せず浅い。A-B層またはB層に漸変している。小黒川上流地域で、つぎの一連の頂点を結んで囲まれた地域に分布している。一三三六メートル頂→一三五四・一メートル頂→一二二〇メートル頂→九九〇メートル頂→八五〇メートル頂→六五〇メートル頂→五〇六メートル頂→六五〇メートル頂→一二二〇メートル頂→一二〇三メートル頂→一三三六メートル頂へ復結。この面積三・五三平方キロ(二・七八パーセント)である。

第27図 石炭岩分布図



第28図 玄武岩質凝灰岩分布図



土壤の生産力  
可能性区分

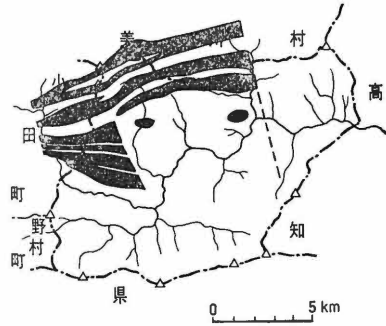
土壤の生産力可能性は、極く概略に等級分けされる。一等地から四等地まで四等級区分されている。一等地には、湿性褐色森林地土壤が組み込まれる。二等地は、黒ボク土壤及び褐色森林地土壤が組込まれ、その面積九三・二六平方キロ（七三・五五パーセント）である。三等地は乾性褐色森林土壤と、淡黄色黒ボク土壤が組み込まれる。広さ二八・七二平方キロ（二二・六五パーセント）である。四等地は岩屑性土壤がこれに組み込まれる。

岩石の概要

岩石は、その大きさにより、岩体と岩片に二分類する。いずれも性質については、その硬度により、風化の状態については、その風化殻の深度によって分類する。岩体の硬度は、一秒間の弾性波伝播速度、岩片の硬度は、一平方センチにおける対圧強度で格付けする。わが柳谷彫刻体の岩体の硬度は、秒間三・〇キロ以上を示して(カ)に、岩片の硬度は、一平方センチにおいて、四〇〇キロ以上を示して(カ)に格付けられる。つぎに風化の状態は、中津山々塊の頂上に続く上部地域の中程度のほかは、彫刻体の全域に及んで浅い風化殻を示している。

つぎに、表層地質の分布状態を見よう。柳谷彫刻体の表層地質は、略七種類の岩石層でできている。(1) 砂岩粘板岩互層は、砂岩は灰色か灰白色を呈し、長石質アレナイト及び長石質ワッケに属するものである。粘板岩は、暗灰

第29図 黑色千板岩分布図



(6) 珪質千板岩はチャートと源岩とする岩石である。(7) 崖堆性堆積物は崖堆の他に、土石流や地すべり等の山麓堆積物をひつくるめたものである。

## 第二節 河川・谷沢

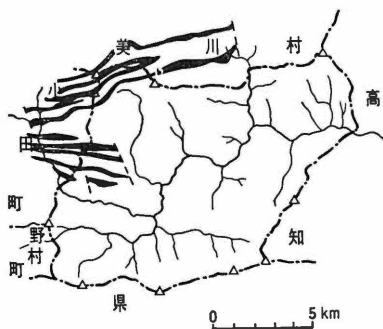
柳谷地塊の上層部をつくる岩石・土壌層にひろがって、河川・谷沢が流動する。さながら我々のからだの皮下筋肉層にわたって、大小の血管が網の目のように張り充ちているのと似ている。たに(谷・溪)は、水が「垂れる」さまから、さわ(沢)は、「水騒ぐ」行為から、かわ(河・川)は、「がわがわ」と水が鳴り響く音なひから、ながれるは、「長い」の知覚を、存命(ながらう)↓生存と意味づけて、河川・谷沢との融合し和解除し合う経験のすべてを、固定し象

徴したもののようにである。たに・さわ・かわが、ながれると感ずるに至つて、いのちのいとなみの実感は、いよいよその真実味を深める。

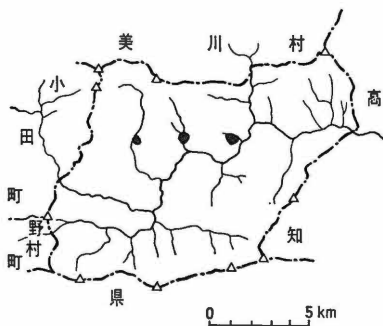
### 谷川系統の概要

個々の谷川が流動するすがたは、一見断片で、気まぐれで全くの偶然を思わせながら、事実きびしい秩序のもとに現われる。中津山塊系統の谷川は、稲村谷・鉢谷・大谷川・上場谷・小松谷・タンノコ谷と並んで、秩序正しく仁淀川へ、これらに対向する、枋谷川・高地休場谷・夜鳴川・エリマル谷も、それぞれ中津山塊系統の谷々に相対面して、仁淀川に合流する。地塊の動脈である黒川系統はすべて、四国カルスト準平原からの血脈を秩序正しく受継いで、たくさんの支流・枝沢を和合して、龍宮(門)に仁淀川の出迎えを受けるかのように、合流している。

第30図 珪質千枚岩分布図



第31図 崖堆性推積物分布図



第32図 地すべり防止指定地域図



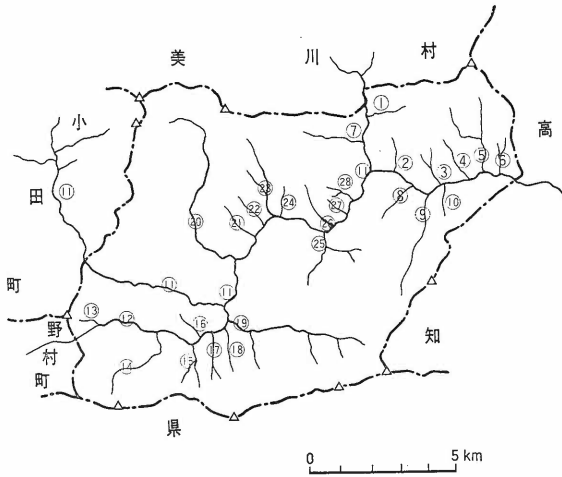


第1表 谷川系統分析表

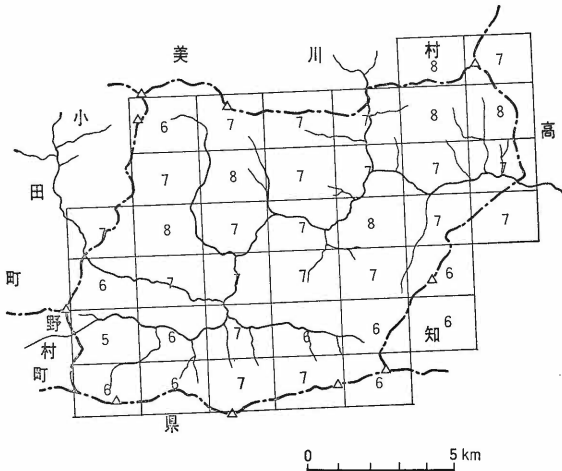
番号	谷川名	上流端(標高)	下流端(標高)	上下流端 標高差	流長(キロメートル)	流向	枝沢の状況
一	稲村谷	二〇〇〇 <sup>メートル</sup>	九四〇 <sup>メートル</sup>	一〇六〇	二・九	西	
二	鉢谷	七五〇	五〇〇	二五〇	一・四	南	
三	大谷川	〇及三〇六〇番地先 大字中津字大谷三〇五	七七〇	二〇	二・二	南東	(県指定)
四	上場谷	一〇一八	八〇〇	二一八	二・八	南	
五	小松谷	一五四〇・六	一三三〇	二一七	三・七	南	(イ)ヒドロ谷 一三六六 <sup>メートル</sup> ～四二五九 <sup>メートル</sup> 長二・六五 <sup>メートル</sup> (ロ)メイトル 一三五〇 <sup>メートル</sup> ～三三〇 <sup>メートル</sup> 長〇・六 <sup>メートル</sup>
六	タンノコ谷	八〇〇	六〇〇	二〇〇	一・一	南	(イ)大窪谷川 一三二二 <sup>メートル</sup> ・四 <sup>メートル</sup> ～三二〇 <sup>メートル</sup> 長二・二 <sup>キロメートル</sup>
七	栃谷川	一三九二	一三〇〇	九二	四・一	東	
八	高地谷	八八七	六二〇	二六七	一・四	北東	
九	夜鳴川	大字柳井川字ヒズイン 四八〇番地及ヨナル ガワ五二二〇番地先	一一〇〇	五八〇	五・八	北	(県指定)
一〇	エリマル谷	九二七・四	七〇〇	二二七	一・七	北	
一一	黒川	小田町大字中川国有林 五九及六二林班先	七六〇	二三〇	二・三	東→北東 東→北	(イ)名荷川(ロ)西浦谷(ハ)ヒガン谷(ニ)本谷川(ホ)郷角谷(ヘ)小黒川(ヘ)崎山谷(ト)大谷(チ)燧谷 (県指定)
一二	高野川	大字西谷字ホドウチ乙 四八一五七番地先字 センクロ乙四八二一六 番地先(野村町トノ境)	二七〇	七〇	七・二	北東→東 北	(イ)オス谷川(ロ)地芳谷川(ハ)サンコ谷川(ニ)横野谷川(ホ)オス谷川(ロ)背之谷川(ト)高野本川 (県指定)
一三	オス谷川	一三二七 <sup>丸石山</sup>	四六七	一・二五	一・二五	北東	

番号	谷川名	上流端(標高)	合流	下流端	上下流端 標高差	流長(キロメートル)	流向	枝沢の状況
一四	地芳谷川	一三三二" (牛が城)	高野川	六九二"	四・二	北西↓北西	右岸四(メド沢川・大畑谷川ほか二)、左岸四(日浦谷川ほか三)	
一五	サンコ谷川	一三〇〇" (姫鶴平)	"	七二〇"	二・九	北西↓北	右岸二、左岸二(瀬戸谷川ほか一)	
一六	横野谷川	九四〇"	"	三二〇"	〇・九	東		
一七	ミミキレ谷川	一一〇〇"	"	五一〇"	二・五	北	左岸一、 右岸五、左岸四	
一八	背之谷川	一三二〇"	"	七四〇"	三・三	北		
一九	高野本川	大字西谷猪伏山国有林 七六林班先	"	九〇〇"	六・六	北西↓西	(イ)右岸三九。(ロ)左岸四三。(ヤカラメ谷・サカイ谷・フルトノ谷・平サコ谷) (県指定)	
二〇	名荷谷川	大字西谷伊豆ヶ谷山国有林 四四林班地先	黒川	一〇四〇"	八・六	南東↓南	(イ)右岸二五。(ロ)左岸一七。 (県指定)	
二一	西浦谷	一一七六・七"	"	六七〇"	一・五	南東		
二二	ヒガン川	九〇〇"	"	四二〇"	一・〇	東		
二三	本谷川	一四九一・二"	"	一〇二〇"	四・三	南	(イ)二二〇〇より二・四流下して合流。 (キロメートル)	
二四	郷角谷	一一〇〇"	"	五三〇"	一・〇	南		
二五	小黒川	一三五五" 頂	"	九一〇"	三・二	北西↓北		
二六	崎山谷	八五〇" 台地	"	五〇〇"	一・五	南東		
二七	大谷	一一三二・四" 頂	"	八三〇"	二・二	東		
二八	燧谷川	九〇〇" 台地	"	六五〇"	一・九	東		

第33図 谷川系統図



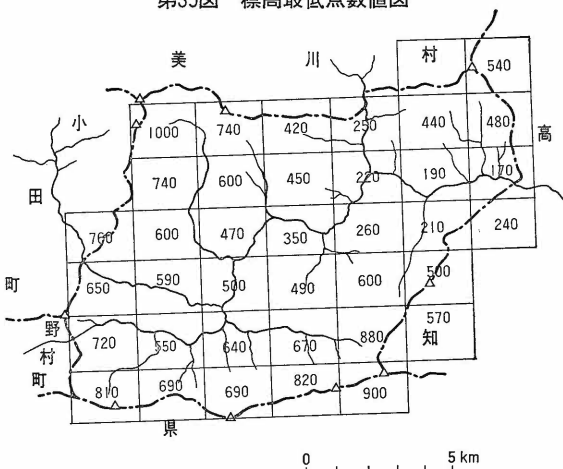
第34図 起伏量図



谷川の断面

柳谷地塊の上部層を流動する谷川は、それぞれの地域上層部の傾斜相に応じて、瀬となり洩をなして流転する。それぞれの相のちがいが、そのはたらしきの違いを現わすのである。そして我々柳谷びとの和解のすがたを創り出してゆく。柳谷地塊の谷・沢の流動緩急を示す地塊断面について、次の方形と対応して考えてみよう。方形は両辺二・四キロ、一・八キロ、面積四・三二平方キロである。その一、起伏量図、ランクを一〇区分にし、方形内の最高点と最低点の標高(メートル)差によって区分する。○—○—五未満、一—五—一〇未満、二—

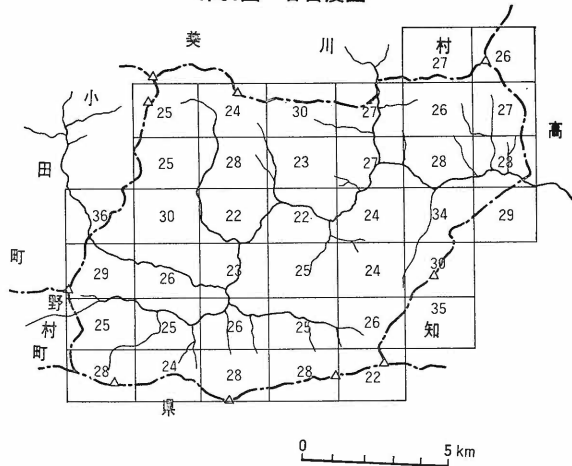
第35図 標高最低点数値図



滴の水、東端の方形（最低点一七〇メートル）内の県境川底に着く水の旅。その旅程、約二九キロ三〇〇メートル。この旅日記、村内小中学生の誰かの手によって、ものにされるとすれば、これもまた、わが村のシンボルとなる。その三、谷密度図、それぞれの方形の各辺をきって流入・流出する谷沢の実数を以て、谷の密度とする。二〇から三五〇六に及ぶ実数値ばかりを示すのは、柳谷地形の壮年期を物語る。かねがね、村道中津線を進んで一〇〇〇メートル地点から、夜鳴川の流向を遡ってその源を見通すと、東西から交互に、この谷に駆け入る稜線の稠密さに気を留めていた

一〇〇〜一五未満、三一〜五〇未満、四一〜二〇〇未満、五一〜三〇〇未満、六一〜四〇〇未満、七一〜六〇〇未満、八一〜八〇〇未満、九一〜一〇〇〇以上とする。柳谷彫刻体は五〇〜八の四ランクである。四つのランクに占める比率は、五一一・七パーセント、六一二・四・三パーセント、七一五六・八パーセント、八一一六・二パーセントである。七〇〜八合わせて、全域の四分の三近くを占める急傾斜である。四国カルスト準平原が、ほとんど五〇〜六であることは、著しい特徴である。八のランクは、中津山々塊・横谷山塊・名荷川奥部両斜面で、中久保川両斜面が、大野が原の地続きで、五の格づけで、「成程」と楽しい。その二、標高最低点数値図、隣り合っている方形内の、最低点数値のひき比べ、区画内谷沢の実相と結びつけ、いろいろの意味づけを試みるのも興味深い。地塊の北西部の方形（最低点二〇〇メートル）内の最高点は、笠取山頂一五六二メートルである。山頂三角点に生まれた一

第36図 谷密度図



が、今成程と納得できた。県境の断層線に沿う脊梁が、この高密度をつくり出している。黒川本流に沿って、二二・二三の低い数が連続している方形内に、郷角・本谷・小村・大成・名荷・古味などの集落が含まれる。谷密度の低い地域に、郷が生れ、郷が育つことが聴かれるようで、土地えらびの配慮が偲ばれる。

### 第三節 気象現象

柳谷地塊は、果てしなくひろがる大気中に生まれ、そして息づきつづける。地塊の上層部を通して、大気を体内に摂り入れて体を養う。

その活動がもたらした不要な廃物は、大気に送り返して、その浄化を託する。この代謝のいとなみを我々は呼吸作用と名づけ、柳谷地塊は「気象現象」と呼ぶ。

#### 複雑多様な気象現象

我々の呼吸作用は、略一定したリズムで、ほとんど無知覚に運ばれる。極めて静穏な活動である。しかし柳谷地塊の気象現象は、構造と機能が大きく、一二六〇ヘクタールの全地塊面に亘っての活動であるから、その現象は複雑多様であって、大気のものいとなみは力動的である。(イ) 天気 伺いから台風の驚き迄ひろがり、天気・天候・気候・気象など、そしてそれぞれの異変と呼び方はさまざま。(ロ) 陽 光・雲・風・雨・雷・霧・霞・靄・霜・雪・雹・霰・龍巻・台風と、千変万化して現われる。(ハ) それらのすがた

第2表 昭36～昭45 10か年間 気温観測記録表 (松山地方気象台)

観測項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
9時の気温℃	1.5	2.4	6.4	13.2	17.7	20.6	24.9	25.9	22.0	14.9	8.5	3.7	13.5℃
最高気温℃	7.5	9.1	13.0	19.1	23.2	25.9	30.2	28.6	27.3	21.9	16.8	10.3	19.4℃
最低気温℃	-1.4	-0.3	1.7	7.3	11.3	15.6	20.1	19.2	17.3	10.4	4.8	0.4	8.8℃
最高・最低平均気温℃	2.7	3.7	7.1	13.3	17.4	20.5	25.0	25.8	22.3	16.2	10.6	5.3	14.8℃
最高気温 極高日	1969 (44) 1-27 19.3	1960 (35) 2-26 20.0	1869 (44) 3-27 23.2	1967 (42) 4-30 29.0	1953 (28) 5-25 32.0	1953 (28) 6-16 25.5	1953 (28) 7-29 37.5	1954 (29) 8-24 39.0	1953 (28) 9-15 37.0	1953 (28) 10-31 31.0	1953 (28) 11-28 28.0	1953 (28) 12-1 24.0	
最低気温 極低日	1959 (34) 1-20 -10.5	1968 (43) 2-13 -10.0	1962 (37) 3-31 -6.9	1962 (37) 4-6 -3.5	1957 (32) 5-14 -2.0	1969 (44) 6-2 5.1	1952 (27) 7-5 10.2	1954 (29) 8-1 12.0	1965 (40) 9-29 5.7	1969 (44) 10-30 1.5	1955 (30) 11-19 -8.9	1967 (42) 12-26 -10.3	

※美川観測所(黒藤川宮成地区)一柳井川前岡宮地区相当地点。

を、気温・気圧・湿度・風向・風力・雲量・雨量・積雪量など、数値でとらえる。(二) 風害・水害・雪氷害・凍霜害・冷害・干害・霜害等、それぞれの防災について具体的に考案させる。(三) 寒暑・冷温の体感から、健康・建築・太陽熱・水資源・生物・文明・農林業経営・電力対策まで、それぞれのもつ影響力と、それぞれとの関係は強大である。真に気象現象は力動性のはたらきをもつものである。

日照—気温

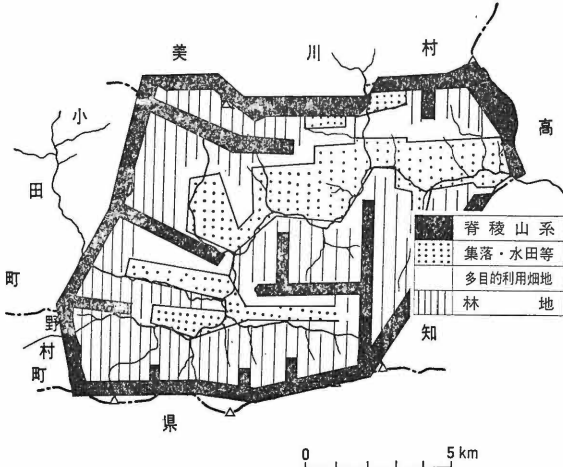
日照—気温は、すべてのいのちあるものの発生—持続—成長のみちすじを支える第一の要因に考えられる。

中津山山塊・四国カルスト高原からの、支脈の走向・標高差・傾斜が、陽あたりに大きい影響を持つ。柳谷地塊の北と南の脊梁山系・西の高原から東走する支脈、これらにはほぼ並行して東流下する河川谷沢系などによって区画された陽当たりと陽陰の配置。略、南斜面の陽当たりに、集落・水田・常畑などが分布し、陽陰の北斜面に、保水・好湿の美林が充ちている。

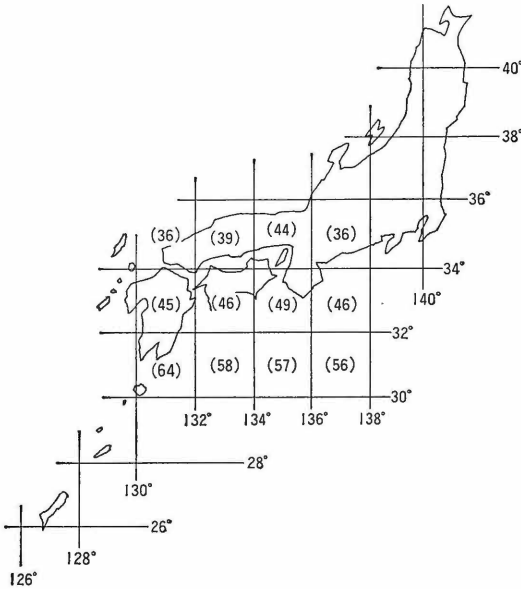
標高差による気温差も大きい。二五〇メートルの旭と八〇〇メートルの中久保とは、五〜六度も、国道三三三号線沿いと、四国カルスト高原とは一〇度以上も違うであろう。

第2表の「気温観測記録—松山地方気象台観測」は、昭和三六(一九

第37図 陽当たり陽陰分布図



第38図 昭和15～同44 30年間台風の通過度数図

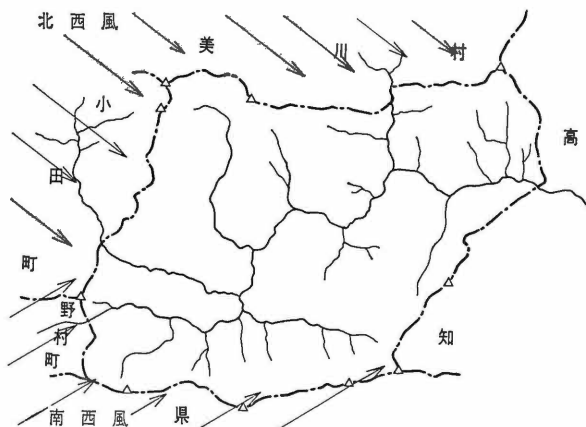


六二）年から同四五（一九七〇）年まで、一〇か年間、美川観測所（わが村の柳井川前地区岡の宮地点に相当する所）の観測記録の要録である。わが村の気温を考えるに当たって、信頼できる数値ではないだろうか。

風—気圧—台風

地肌の標高の高低は、水の流れを起し、気温差—気圧差は、大気の流れ—風を生ずる。起伏の大きいわが柳谷地塊では、峰すじ谷すじの間の気温差は、時々刻々高低変化する。したがって、そ

第39図 柳谷地塊に吹く恒常風々向図



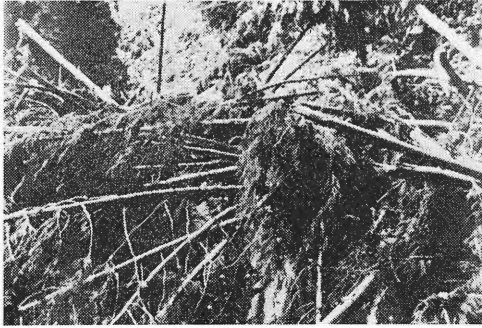
それぞれの谷沢流域では、いつも風が生れて流れつづける。山風・谷風と呼んでなじみ合う。そしてそれは、昼と夜、夏と冬でその向きを交互に変え、その変わり目に、「風ぎ」という穏やかなたゞずまいをかもし出す。また、中津山山塊と四国カルスト高原を骨髄とする柳谷地塊は、太平洋・瀬戸内の海面に相對して、常にそれらの気温差—気圧差に、密接なかかわりを持ちつづける。カルスト高原の空に雨雲漂うと、黒潮からの霧さが訪れて、カルストの笹原を騒がせ、大陸寒気団がやゝ南下を告げると、北からの季節風は、忽ちに中津山頂とカルスト高原に清楚な雪化粧を施す。しかし、四季を通じてみると、この地塊に吹いてくる風は、北西風と南西風が一ばん多いようである。一般に、朝夕・昼夜・季節の風については、我々柳谷びとのくらしとのかかわりに、ある調和が保たれている。しかし我々の予測を超えて、突然の衝撃を与えるのは、台風の襲来である。

年間の台風襲来のコースは、時期により略三つに分けられる。六月以前の前期は、西に偏して北西進又は北進して、中国方面へ、一〇月以降の後期は、小笠原諸島以南の洋上を東進して洋上で消滅する。ともに我国への上陸コースではない。それらの中間の七く九月が、台風の通過又は上陸コースとなる。第38図の「台風の通過度数図」を見ると、わが柳谷地塊は、北緯三二度線や三四度線・東径一三二度線と一三四度線を、それぞれ対辺とする方形内に位置する。したがってこの方形内は直接的な、周囲の各方形内は相当程度の影

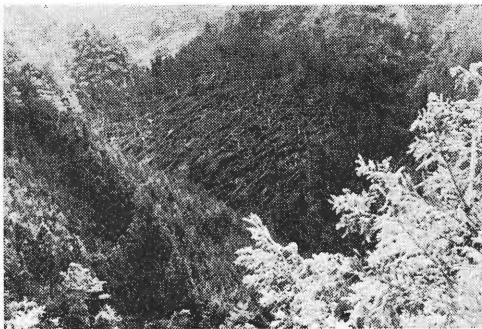


第3表 昭和15(1940)より30年間  
同44(1969)まで  
台風の上陸数表

月	4	5	6	7	8	9	10	11	計
計	1	1	7	18	45	33	7	1	113
30年間平均	0	0	0.2	0.6	1.5	1.1	0.2	0	3.8

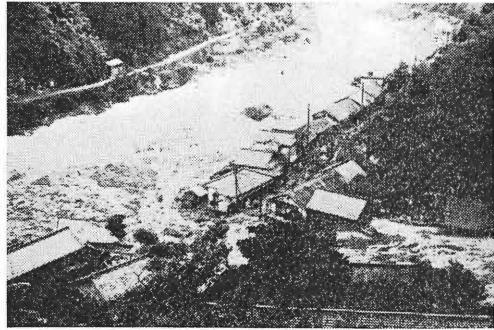


台風による森林災害



台風による森林災害

響を被るものと読みとる。次に第3表の「台風の上陸数表」を見よう。上陸数年平均三・八度約四度中一・二度は四国上陸した数と見る。わが柳谷村は、太平洋側上陸地点に近い。上陸した台風は、洋上のたくましい勢力を保持したまま、地塊のカルスト高原に、風雨の塊を運ぶ。コースを西側・東側いずれにとつたにしろ、地塊に向ける風向が正反対となるだけで、置いて去る風雨の塊は同じである。地塊は一く二昼夜、強烈風・豪雨の演出に曝される。山肌・川辺のいたみ、道、橋のきず、村びとが地肌を托した「育てもの」のそこない等が、台風一過後の日ざしに現わされる。この大地に定住して以来、年ごと繰返した柳谷びとの心痛である。とは言え、この災いもまた、一つ一つある力を蓄えてゆく手掛りともなつてゆくのである。



栃谷の濁流と仁淀川の出水

リ、四国電力KK面河電力区観測定の、第5表昭和四〇（一九六五）年から同五七（一九八二）年まで一八か年間年月別降水量表では、年平均二一七〇・八ミリ、二四七五・八ミリメートルを記録する。いずれも先の四二年間の数値に合致しており、多降水性の信頼度をたかめている。また第6表の霜・雪等についての記録によって見ると、降水量の多量性に準ずる多様性をはつきりと感得することができる。

以上の諸観測から、力動的なあわたしさを感じさせる中であって、わが柳谷地塊は、穏やかな息づきをつづけている。秋が深まり、牧場からの牛共の帰宅が終ると、高原は霧水をつけ、初雪の淡化粧をはじめ。そして、さつきやぶなの群落は、くる年の美粧を約して、つつましい冬ごもりに入る。雪積る峰すじ・谷すじに沿って延びてゆく林

### 雲—雨—雪

標高の大きい山塊・高原を骨格としている柳谷地塊の、雲との交わりは深い。地塊・高原は雲が走り、霧・靄に包まれがちになる。雲は雨をよび、山頂の冷氣と和して雪をとどめる。雲の走り、霧・靄の厚みで、村郷の天気を予測する、やなだにびとの生活知恵はすばらしい。

西南日本の中央構造体で区分されている四国太平洋側の高知市、瀬戸内側の松山市、構造線地帯のわが柳谷地塊、これら三地点の降水量の比較を試みよう。世論は高知市を筆頭と考える。事實はわが地塊を筆頭に据えている。明治二三（一八九〇）年から、昭和六（一九三二）年まで四二年間、松山測候所委託の美川観測所は、降水量を毎年二〇〇〇ミリないし二五〇〇ミリと記録している。

なお最近のものとして、昭和一〇（一九三五）年から同四五（一九七〇）年まで三五年間の降水量（第4表松山地方気象台観測定降水量記録表）年平均二二一三・ミ

第4表 昭10~昭45 35年間 降水量記録

(松山地方気象台 美川観測所)

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
観測事項													
降水量平均(mm)	99	96	131	109	178	257	285	306	356	151	96	88	2213
最大降水量日	31 (1956) 4	31 (1956)	33 (1958) 25	33 (1958) 22	35 (1960) 26	35 (1960)	18 (1943) 22	10 (1935) 28	36 (1961) 15	42 (1967) 27	27 (1952) 4	26 (1951) 30	
その量(mm)	68	56	65	75	91	130	360	280	385	253	91	63	

四国電力KK 面河電力区  
観測定記録に拠る

第5表 昭和40~57年 18か年間 年月別降水量表

観測定地点 面河第一(O)  
黒川第五(K)

年	月 測定地	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
		40	O 71.3	11 33.7	4 58.4	10 162.9	8 248.6	14 216.4	12 309.5	283.2	9 209.7	9 917.8	6 165.5	13 118.0
	K 84.6	12 45.1	4 60.0	9 156.5	14 249.7	16 222.5	14 223.5	7 209.7	11 738.3	11 738.3	6 82.6	14 151.0	17 118.5	134 2,342.2
41	O 87.8	12 109.0	17 219.0	21 261.2	12 254.1	13 271.9	8 291.4	15 681.1	10 693.7	5 17.2	12 94.8	8 69.8	8 151.0	151 3,081.0
	K 84.9	10 99.6	15 234.8	18 173.4	11 239.1	16 289.4	9 235.6	16 678.3	10 724.6	8 30.7	9 144.0	6 63.4	6 2,997.8	149 2,997.8
42	O 82.5	11 33.3	18 182.0	11 404.3	11 90.0	11 83.8	15 251.3	6 55.9	5 25.1	10 157.1	11 86.7	14 57.1	14 1,059.4	137 1,059.4
	K 114.4	12 49.8	14 194.4	18 334.7	11 167.8	11 58.0	16 433.3	5 99.0	4 86.0	10 205.0	11 82.0	10 59.0	10 1,885.4	133 1,885.4
43	O 60.1	10 139.3	7 72.6	8 60.1	7 91.6	17 170.0	17 394.9	14 338.5	17 450.1	17 45.3	11 17.0	8 109.0	12 1,948.5	139 1,948.5
	K 91.2	9 73.7	10 116.0	7 71.0	7 72.0	15 202.0	16 483.0	12 360.0	15 383.0	10 68.0	10 40.0	9 120.0	9 2,079.9	122 2,079.9
44	O 140.5	15 108.2	14 118.9	14 99.3	15 84.9	14 576.6	15 434.5	8 183.0	8 27.4	9 39.8	10 89.9	15 80.3	15 1,983.3	160 1,983.3
	K 170.0	14 130.0	14 134.0	10 113.0	12 80.1	13 355.0	12 439.0	8 270.0	8 47.0	9 49.0	9 101.5	14 88.0	14 1,981.0	142 1,981.0
45	O 35.6	14 473.4	13 69.7	12 256.7	15 191.2	21 387.0	17 198.8	14 558.4	14 68.4	14 101.1	10 83.0	8 86.2	8 2,509.5	161 2,509.5
	K 36.0	3 183.0	12 82.0	16 306.0	15 305.0	20 475.0	15 209.0	14 718.0	15 115.0	15 188.0	10 113.0	7 89.0	7 2,819.0	154 2,819.0
46	O 43.7	18 65.8	11 99.8	9 51.1	12 226.4	18 236.2	12 138.5	18 1,148.3	11 98.7	10 97.3	6 26.3	14 149.1	150 2,381.2	150 2,381.2
	K 58.0	9 95.0	16 138.0	9 73.1	13 271.0	18 308.0	10 205.0	19 1,451.0	13 146.0	11 114.0	6 37.0	14 93.0	149 2,989.1	149 2,989.1
47	O 149.0	15 181.3	16 111.9	12 183.1	13 116.2	15 480.2	19 927.9	11 116.7	10 447.5	13 139.6	14 180.5	7 103.0	7 2,136.9	160 2,136.9
	K 209.0	14 227.0	15 147.0	12 243.0	11 833.6	14 552.0	15 725.0	11 125.0	11 479.0	13 136.0	14 213.0	10 140.0	155 3,329.6	155 3,329.6

年	月 測定地	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
		48	O	12 107.0	11 69.0	5 28.0	13 278.0	8 233.0	9 135.0	14 297.0	16 538.0	15 216.0	9 86.0	7 77.0
	K	15 140.0	12 90.0	7 32.0	13 304.0	8 247.0	9 155.0	11 303.0	10 620.0	15 221.0	9 107.0	7 79.0	12 57.0	134 2,355.0
49	O	1 32.0	10 73.0	11 73.0	10 202.0	10 66.0	10 187.0	19 321.0	12 224.0	10 439.0	11 166.0	7 56.0	7 71.0	118 1,910.0
	K	2 41.5	8 110.0	13 85.0	9 221.0	10 92.0	10 216.0	20 348.0	12 188.0	7 412.0	10 177.0	8 74.0	9 103.0	119 2,667.5
50	O	13 113.0	15 49.0	5 59.0	9 79.0	14 56.0	17 421.0	15 190.0	15 713.0	15 184.0	15 177.0	8 84.0	18 129.0	155 2,300.0
	K	13 150.0	15 95.0	4 87.0	16 229.0	12 76.0	16 385.0	16 220.0	15 758.0	16 273.0	18 230.0	8 112.0	21 159.0	170 2,812.0
51	O	10 39.5	8 169.0	10 94.0	14 217.0	11 226.0	15 230.0	16 401.0	13 95.0	12 801.0	10 182.0	14 101.0	11 85.0	144 2,640.5
	K	11 87.0	10 194.0	11 120.0	15 232.0	13 236.0	14 274.0	19 401.0	12 103.0	11 798.0	7 157.0	11 102.0	12 97.0	146 2,801.0
52	O	7 46.0	7 76.0	14 162.0	14 168.0	14 163.0	17 301.0	6 35.0	11 266.0	11 425.0	5 90.0	10 147.0	8 55.0	124 1,934.0
	K	8 54.0	9 93.0	17 166.0	14 209.0	14 237.0	17 366.0	5 63.0	14 313.0	12 344.0	7 88.0	14 169.0	8 65.0	139 2,167.0
53	O	11 70.0	16 92.0	10 70.0	11 77.0	8 78.0	14 204.0	10 107.0	12 193.0	11 121.0	7 89.0	8 69.0	13 166.0	131 1,336.0
	K	14 105.0	17 120.0	12 103.0	14 133.0	9 116.0	18 307.0	10 156.0	9 270.0	11 613.0	8 72.0	5 62.0	11 75.0	133 1,632.0
54	O	12 99.0	10 90.0	10 111.0	10 201.0	6 74.0	16 346.0	13 146.0	12 155.0	13 488.0	2 208.0	12 179.0	9 70.0	128 2,197.0
	K	11 134.0	13 155.0	13 183.0	13 219.0	8 100.0	16 433.0	11 161.0	17 274.0	11 502.0	5 299.0	12 225.0	9 121.0	138 2,806.0
55	O	21 88.0	7 39.0	14 149.0	10 84.0	14 296.0	16 227.0	18 489.0	21 451.0	12 433.0	13 184.0	6 38.0	12 80.0	164 2,558.0
	K	20 122.0	10 64.0	14 209.0	11 135.0	12 282.0	18 300.0	18 517.0	23 574.0	12 499.0	13 286.0	5 70.0	16 131.0	172 3,189.0
56	O	6 22.0	9 77.0	11 93.0	13 130.0	10 97.0	15 205.0	16 216.0	13 56.0	12 13.2	13 158.0	12 110.0	5 30.0	135 1,207.2
	K	3 13.0	11 103.0	13 172.0	14 201.0	11 125.0	17 261.0	16 333.0	14 84.0	14 16.6	12 200.0	12 139.0	4 30.0	141 1,677.6
57	O	11 38.0	7 63.0	13 102.0	10 77.0	10 95.0	9 103.0	17 459.0	8 570.0	3 376.0	5 38.0	13 135.0	7 29.0	119 2,085.0
	K	14 82.0	9 96.0	15 181.0	10 135.0	10 148.0	8 83.0	20 501.0	10 720.0	11 423.0	4 29.0	13 199.0	9 37.0	133 2,634.0
計	O	1,325.3	1,987.0	1,873.3	2,991.7	2,687.0	4,781.1	5,607.8	6,676.1	6,224.9	2,140.9	1,722.2	1,508.5	39,075.8
	K	1,776.6	2,061.2	2,448.8	3,488.7	3,179.3	5,241.9	5,956.4	7,815.0	6,320.5	2,518.3	2,112.5	1,645.9	44,565.1
月別 平均	O	73.6	110.3	104.0	166.2	149.2	265.6	311.5	370.8	345.8	118.9	95.6	83.8	2,170.8
	K	98.7	114.5	136.0	193.8	176.6	291.2	330.9	434.1	351.1	139.9	117.3	91.4	2,475.8

第6表 昭10~昭45  
35年間

霜・雪等観測定記録

松山地方気象台  
美川観測所

積雪の深さ最大値		霜最早日	初雪最早日	積雪の最大継続日数
昭38—1—31	83cm	昭39—11—5	昭42—11—21	昭38—1—1~3 —24 59日
〃 2—1	75cm	霜最晩日	晩雪最遅日	
〃 2—28	72cm	昭41—4—20	昭42—3—24	昭43—12—8~44 —2—28 51日

第五章 柳谷地塊(自然)のちから

第7表 昭36~昭45  
10か年平均

天気現象日数

松山地方気象台  
美川観測所

種別 月別	雨	雪	ひょう	あられ	霧	濃煙	雷電	霜	霜柱	結氷	快晴	曇天	≥b m 風力
1	12.0	7.5	0.0	0.6	1.8	・	0.0	3.4	・	・	5.0	16.9	・
2	11.9	6.0	0.0	0.3	1.9	・	0.0	2.7	・	・	5.0	13.8	・
3	13.8	2.4	0.0	0.2	3.6	・	0.2	1.8	・	・	7.5	13.7	・
4	13.6	0.1	0.0	0.1	2.8	・	0.1	0.8	・	・	8.5	11.9	・
5	13.0	0.0	0.0	0.0	0.4	・	0.2	0.2	・	・	7.9	14.4	・
6	14.2	0.0	0.0	0.0	3.6	・	0.4	0.0	・	・	3.7	15.3	・
7	15.5	0.0	0.0	0.0	4.8	・	1.7	0.0	・	・	5.1	13.8	・
8	13.8	0.0	0.0	0.0	5.5	・	1.3	0.0	・	・	8.0	11.2	・
9	14.3	0.0	0.0	0.0	7.1	・	0.9	0.0	・	・	5.7	12.9	・
10	10.6	0.0	0.0	0.0	8.6	・	0.1	0.1	・	・	9.1	12.4	・
11	9.7	0.3	0.0	0.3	6.5	・	0.0	2.5	・	・	10.4	10.5	・
12	13.4	3.5	0.0	0.7	2.6	・	0.1	4.2	・	・	7.0	14.5	・
合計	155.8	19.8	0.0	2.2	80.1	・	5.0	15.7	・	・	82.9	161.3	・
%	29.80	3.78	0	0.42	15.32	・	0.95	3.00	・	・	15.85	30.85	・

道の節目は、変わってゆく地塊に、あすの栄えを偲ばせて、安らいだけいをつづけていく。

### 天気予兆へのねがい

あすを意識するいのちたちにとって、あすを支えるものとしての関心は、天気である。あすの意義づけはあすの天気が、夜明けて迎えた今日の確かめは、今日の天気が支配する。人々はいち早く、天気を生きた証あかしの座に据えた。ここで、天気の子兆を知ろうとする強いねがいが芽生えた。予兆を知る科学の萌しは、わずか三世紀ほど前からである。予兆の手掛りを、生活の知恵を利とくことに求めるほかはない。相手は天気を支配する具体物への注視である。雲・風・大気の冷温等々。その状態の目撃と体感、極めて直接そのもの。予想と現出の一致不一致の経験を、大切に積み重ねつづけた。この真剣な試みが、それぞれの生活圏における、

気象予兆の俗信俚言となつて、その地域のくらしの証しとなつたのである。

わが村にも、天気についての俗信俚言は**ずいぶんたくさんある**。北九州大の民



雪の管行

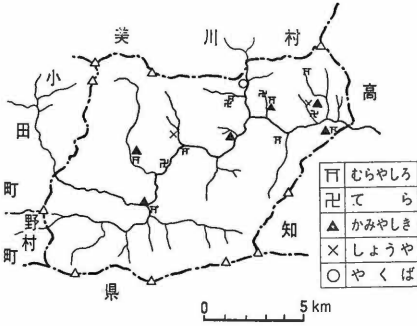


林木の雪害



三八豪雪

第40図 ひろばの分布図



第五章 柳谷地塊（自然）のちから

#### 第四節 「ひろば」と「みち」

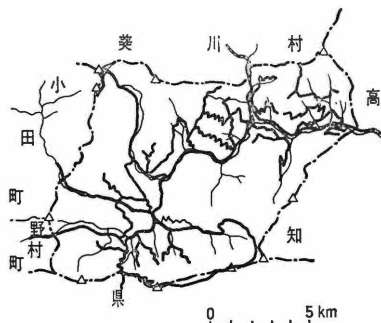
俗研究班が五五ばかりヒヤリングしてくれている。このことについての詳細は、民俗文化編にゆずる。

二〇〇年程前から、気象現象測定器具がぼつぼつ考案され、天気予兆を知る歩みが始まった。つづいて、等圧線発想から、「天気図」づくりが始められ、観測々定数値の図表化が進み、「天気予報」という行為が、生活情報の世界に大きく活動を開始した。今日、気象学の学的成長、観測々定技術の跳躍的進歩・気象現象関係機関の整備・情報メディアの発達等々、それらの総合される所、**「天気予報」**は完全に生活面に大いなる地歩を確保した。今後、技術と精度はますます高度化されてゆき、村びとの気象現象との和解調通の微笑が窺えるのも、さして遠くないものと思われる。

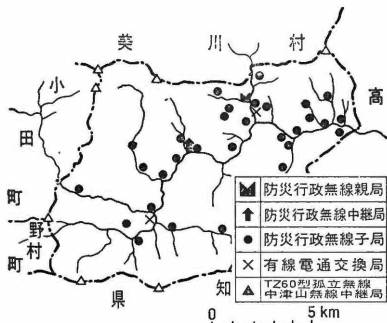
自然は、こころひろく大きい。すべてのいのちが生れ出で、そしてそれらが生きつづけることを、大らかに認めているから。更にそれらのいのちに、よのなかつくり（社会化）をさせているから。いのちとよのなかの二つは、自然が公開する最もすばらしい生産物と理解したい。

柳谷地塊（柳谷の自然の本体）では、人々との出会いがその呼び込みに始まった。そして呼び入れた人々の世の中つくりをやらせてきた。村の夜明けの郷びらきである。この郷びらきのいとなみに欠かせないものがある。世の中つくりを心を通わせ合う手掛りである。その手掛りの役割を担ったのは、「ひろば」と「ひろばに通ずるみち」である。柳谷の自然は人々に、この二つの手がかり

第41図 道路網図



第42図 電通系統図



を充ててくれた。この二つは自然の心の工作物の中で、最もすぐれたものと地位づけして、ちからの最先端に置くことを適当と見る。

村政府—ひろば

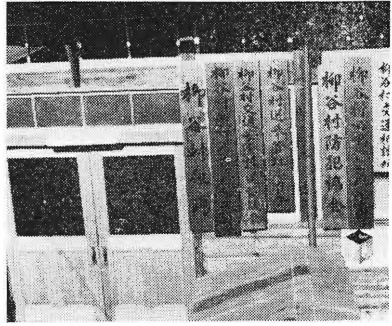
「村政府」は村社会のひろばである。村びとが社会活動する脳中枢である。呼び込みせられた人々が、心通わせ合うに

は、場所と機会が要る。村政府—ひろばはそれを充たす、場所と機会のはたらきをもつ。すがたは郷—社会のすがたに応じた変り方を見せてきた。その移り変りのあらずじを見よう。(一)六〇〇年ごろから、群れ群れのひろばは、「やしろ」「ほこら」からはじまる。信仰を中心として、すべての文化化活動を、社会的活動のすがたに拡充して発展してきた。(二)「むらやしろ」を中核とし、「てらやしき」「かみやしき」などが、今日の外局に似たはたらきをして、ひろばの役割を強化した。(三)「お庄屋やしき」。社会づくりが進み、統一社会が完成したので、ひろばの役割は、お庄屋やしきに統轄され、「むらやしろ」「てらやしき」は、助言と協力のはたらきを整備した。(四)やくば、明治五(一八七二)年から戸長やくば、明治二二(一八八九)年から村役場となり、拡充と整備を重ねる。今日柳谷の自然の脳神経中枢として、構造と機能を完備する。

情報系—みち

「情報系」は、村社会のみちのはたらきである。郷びらきと同時に、「みち」は「ひろば」の整いに伴って進んだ。「社会づくり」は「みちづくり」を絶間ないはたらきとしてつづけてゆく。今日、「み





現庁舎になるまでの村役場玄関

「ち」は有形的の「道路網」と、無形的の「電通系」の二分野となる。うち電通系は、「有線媒体」から「大気媒体」へと、はげしい技術進歩を続ける。柳谷地塊の「みち」は、「地表と大気」いずれの分野においても、時の歩みに合わせた拡充ぶりを見せてゆく(詳細は第四編第四章―ひかり参照)。

## 第六章 地肌のちから

やや南に傾いた、平行四辺形の均整のとれた地盤体。そして整った健やかさの地塊。やなだにの自然は、やなだにびとの文化化の諸活動との、ひろやかにやわらぎ合ったかかわり合いを、その肌色に見せて来、見せて居り、見せて行く。

### 第一節 やなだにびとの文化化活動以前に見せていた地肌色

#### —夏緑落(広)葉樹林の肌色

北緯三三度台の緯度、二四〇メートル(県境)から一五六二メートル(笠取山頂)に及ぶ標高差、面積の大部分を占める大起伏山地、これらを複合した地肌の広がり。この大地(地肌)は、やなだにびととかかわりのない時期に、ひとを除いた動植物と、どんな融和のかかわりをつくり上げて、夏緑落(広)葉樹林の地肌色となつたか。そして夏緑落(広)葉樹林の地肌色は、やなだにびとの文化化諸活動が始められるまで、その生態美を、ずいぶん永く見せていたものだろうか。

#### 植物の群落

- (1) 裸の地肌に、はじめて苔・芝草・雑草など、小さい先駆植物の群落社会ができた。コケやシバ類がさかえたところと見られる。
- (2) 一年生の丈の低い草木類が目立ち、やがて丈の高い草木類がさかえ

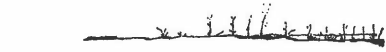
れる。

たところとなる。(3) やがて多年生の草木類や木本類が交替する。多年、生き続ける植物に進化し、灌木・マツが草木類に代わってさかえる。(4) 高い木が地面の上層を覆う。ブナ・ナラ・クリ・ツガなど夏緑落(広)葉樹が、モミなどの常緑広葉樹を交えて、温帯樹乃至亜寒帯漸移帯樹林相を見せる。灌木・草木・蘇苔等は、高い木の下層に適地を選んで、夏緑落(広)葉樹と共生する群落をなし、また標高差に応じ、低地から高地にかけて群生する。

植物・動物  
共生の生態

水に棲む微生物をはじめ、苔につく虫、樹間の一すじの光を追ってとび交う昆虫等々。動物たちの生い立ちもまた、植物に増して多様多彩であったであろう。日の光の受け入れ、大気とのやりとり、植物・動物の共々に生きてゆく関わりなど、ひろやかになごみ合った生態のすがたであったものと想われる。

第43図 裸地から相林まで変遷図



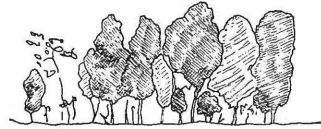
- 1 メヒシバ、ヒメムカシヨモギなど芝草や雑草の先駆植物が生える。



- 2 灌木とマツが生えてきて、芝草、雑草を追いだす。

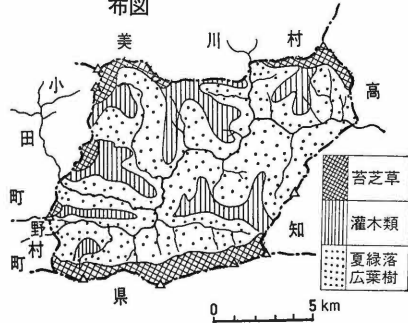


- 3 マツが成長し、その下草として樹陰でも芽を出せる広葉樹の若木が生える。



- 4 シイ、カシなど広葉樹がマツを追い出し、最後の相をつくりあげる。

第44図 夏緑落(広)葉樹林期の生態分布図



## 第二節 やなだにびとの文化化活動開始以後の地肌色の移り変り

### ― 焼畑を粧う地肌色

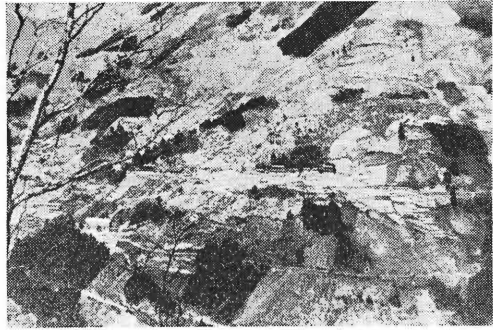
夏緑落（広）葉樹林の地肌に、焼畑の粧いはじめられた。そしてその焼畑の粧いは点から、点の複合した面へと伸び広がっていき、全面夏緑落（広）葉樹林の地肌は、だんだんその色相を変えていった。そしてそのお色直しのテンプが速さを増し、濃紫紺色の重ったい色相となつたのが、今日のスギ・ヒノキ等の針葉樹林の林相なのである。この色どり替は、今日迄千数百年に亘つて続けられてきたのであろう。これが我々やなだにびとと、柳谷の自然との間で行われた和解のいとなみの証しなのである。

第45図 甲番地地域焼畑づくり開始分布図



### 甲番地地域の 焼畑づくり

畝順帳や土地台帳に、甲乙の部別がつけられている。焼畑づくりは、甲番地地域からはじまる。郷びらきの区域に一致している。人々はまず、住いをつくる屋敷地をこしらえ、その周辺に、食用作物を栽培する耕地を拓いた。今日の普通畑（常畑とか熟畑とも言う）である。開田は、地づら、水がかりを見計つて、普通畑の域内で選地したものと思われるから、普通畑地域に含める。郷びらきの初期には、甲番地外の地域が豊かだったから、それらの林野に自生したものを採取して、生活材補給に充てていたものと思う。



名荷部落（焼畑）

### 乙番地地域 へひろがる

郷びらきが進み、人口も殖え、生活様式も変る。郷全域の生活材の不足が開始する。生活材のうち食料確保は、いささかの猶予もゆるされぬ。そのため乙番地地域へ焼畑をひろげねばならない。遠い道のり、低い気温と地力、災害を含めた数々の不利な条件などが重なる。耕作に労働は多くなり、受ける大地の報いは薄い。常畑化・開田への期待はほとんどもてない。しかし一方、やなだにびとの開郷意欲は、いささかの淀みも生じなかった。「切替畑耕作」の試みと蓄積に、いのちをかけた通したのである。とうもろこし・あわ・ひえ・だいず・あずき等、穀物つくりに汗を流した。その汗、いま地塩となつて、焼畑に濃く蓄えられている。

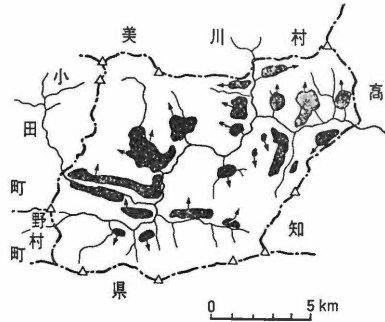
### 拡がった焼畑は ミツマタの花で 黄色く彩られる

乙番地地域の焼畑つくりは続けられる。食用作物耕作だけの切替畑経営は、不作凶作の危険性高く、生産性は低い。増反また増反によつて、生計を立てねばならない。加えて、貨幣商品経済の時代の流れは、避けて渡ることを許さ

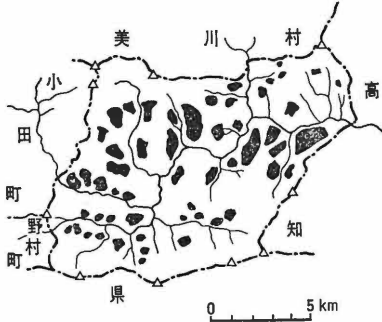
ない。

明治一七（一八八四）年ごろ、ミツマタが久万山へ導入された。面河・仕七川・弘形・中津・柳谷へとその栽培圏が拡がっていった。わが村へは、土佐津野郷からはいってきたのである。ミツマタは中国原産のテンチョウゲ科の木で、我国へ入来してからは、和紙原料に供する特用作物として山地に栽培された。この植物、日光・温度・湿度・傾斜面・土壌・災害など、奥地山地でも充分に充たし得る栽培条件をもつ。わが柳谷の地肌は、上乘の好適地として

第46図 乙番地域へ焼畑拡大期分布図



第47図 ミツマタ畑分布図



迎えられた。拡がりゆく焼畑（切替畑）は、ミツマタ畑の前畑を了して、一挙に切替えられた。更に未墾の樹林は、ミツマタ専耕耕地として増反されたのである。わが村の切替畑地肌は、ミツマタ畑一色の景観に彩り替えられた。需要は特需を想わせる相で増大してゆく。ミツマタは貨幣商品経済の寵児にのし上り、やなだにびとは、くつろぎの笑みを、黄色一面のミツマタ畑に注ぐ正午を迎える。

黄色いミツマタ畑  
蒼い林地に変わる

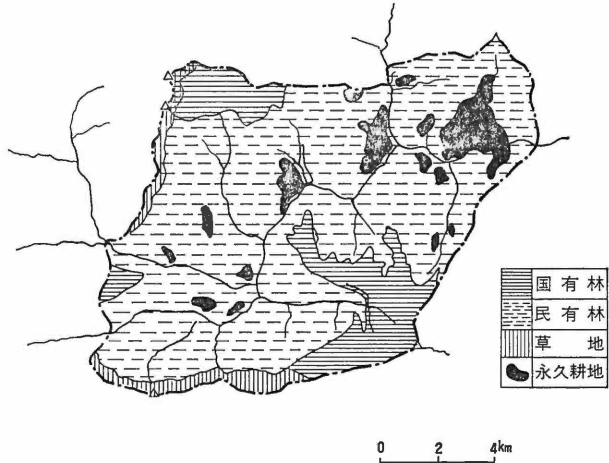
生活様式の移り変わりにつれて、生活材の需要は揺れ動く。書字・印刷方式が変わって、和紙の売行きは途絶え、窓ガラスの普及により、障子紙の需要は落ちる。やなだに

のミツマタも、印刷局納で幅を利かして来ながら、円札が硬貨に切替えられて、局納めの流れも閉ざされてしまった。ミツマタ畑は切替の運命に迫られた。しかし、幸なるかな。ミツマタの適地は、林地の適地でもあった。農家はすべてのミツマタ畑に、更に高地の未墾地拓きを加え、スギ・ヒノキの植込みを決断実行した。年を逐うにつれ、林地は増反する。今日植林率は九〇パーセントを超えた。林家保有の植栽面積実に九四〇〇ヘクタールに及んでいる。全面積一〇〇〇〇ヘクタールになんなんとする地肌は、今濃い蒼色に彩り込められている。

蒼色の林相が  
醸す森林生態

夏緑落（広）葉樹林相から、針葉樹林相に至る地肌色の変化は、柳谷の彫刻体を生息場所とする、すべての生物のかかわりかたを大きく変えている。

第48図 針葉樹林相分布図



られる命運に曝されるに至った。(3) 「健全な森林生態」の樹立が、新しい課題となるのではないだろうか。伐期が来て除伐した跡地には、植栽樹種の転換を具案し、「健全な森林生態」の樹立を図るべきであろう。

(1) 夏緑落(広)葉樹林相の森林生態 この林相では、光・温度・水分・雨・風・気圧など、適度な組み合わせと変化を森林生態気候が醸されていた。高い木が上位に、灌木が下位に、蘇苔や草本類は、地肌に直接して植生する。したがって小動物をはじめ、山野鳥獣類は、それぞれゆたかに種の繁殖を得て、共生融和の世界を欣び合っていたと想われる。(2) 蒼色針葉樹林相の森林生態 スギ・ヒノキを主軸とした針葉樹林は、その密生繁茂した樹冠によって、森林生態気候を単純化した。温度・湿度は日の出没を周期として変り、四季の季節による変化は極めて小さい。樹間は、秋から冬にかけて冷えにくく、春になっても温まりにくい。風は流れず、大気は停滞する。ひと言で言えば、冷凍冷蔵庫になぞらえられる生息の場所に变化した。樹下・地肌に、灌木・蘇苔・草本類植生することができず、大小の樹間動物はほとんど、転棲あるいは種の断絶を強い

## 第三節 県立自然公園（四国カルストを主軸とする）の草原・溪谷

夏緑落（広）葉樹林の地肌色から、焼畑つくりによってつぎつぎ移りかたをする傍らで、ただ一つ、なんら変りかたを見せないのは、四国カルストを主軸とする「県立自然公園」の地肌色と言えよう。今日境を接する町村と共に、「県立自然公園」の指定を受けている広域で、国営大規模草地開発事業・観光開発事業等の進みも伴い、新しい関心を世に示している。

県立自然公園に係る柳谷の区域は、姫草から五段高原に至るカルスト地形を誇る草原、ミツバツツジ・ブナ林などが群生する大川嶺を主峰とする一団地、甌穴群と溪谷美に充ちた黒川主流域の三地域である。高く平らな頂をもつ山、深く刻まれた黒川の溪谷、それがわが自然公園の地形の特色である。姫草から五段高原に及ぶ平坦面、そして大川嶺へとのびる標高一五〇〇メートル級の高位平坦面は、掘り下げられた低平な土地が、今の高さまで隆起したものである。隆起した谷川は、若返って、浸蝕風化をはじめ、さらに断層破碎帯などのはたらきも手伝って、黒川の形成を早めたものと思われる。平坦な頂・溪谷・カルスト・洞などの風致特色を活かした、優美・壮美の和合した相<sup>すがた</sup>を見せている。



#### 第四節 柳谷にすむ鳥獣

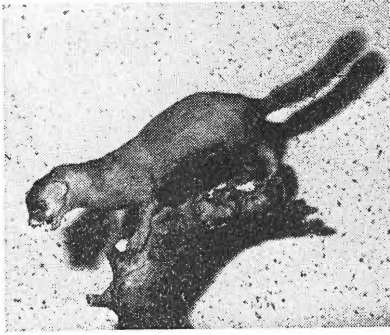
上浮穴郡は関西第一の高峰石鎚山（一九八二メートル）と、その連山に囲まれた、緑多く水清らかで四季の変化にも富む郷であり、そこにすむ鳥獣も多種多様である。

わが柳谷村は上浮穴郡の最南端に位置し、明神山・大川嶺・笠取山・丸石山・五段高原など一三〇〇メートル〜一五〇〇メートル級の山山が連なり、仁淀川に沿って走る国道三三三号線との標高差は、一〇〇〇メートル〜一三〇〇メートルに及ぶ。

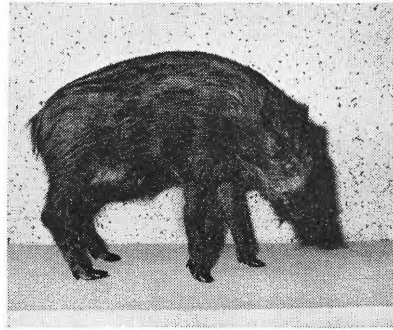
暖温帯常緑広葉樹林域（冷温帯落（広）葉樹林域にまたがり、植物の種類も多く、鳥獣にとつてこの上もない生存条件を満たす恵まれた地域であるといえるであろう。

人類がたどった長い歳月をかけた農耕文化の進展は、徐々に自然植生の変化をもたらしてきたが、太平洋戦争後のスギ・ヒノキの植林による人工林化ほど、急激に自然植生を一変させたことはなかった。自然への人為的な働きかけは、ただ植物相を単調にしたにとどまらず、木の実・草の根を食って生きる鳥獣に対して、そのせい息条件を苛酷なまでに制約していったとはいえないだろうか。

黒川の清流沿いの急峻な斜面、柳谷キャニオンに代表される一五〇メートル



テ ン



イノシシ



ハクビシン

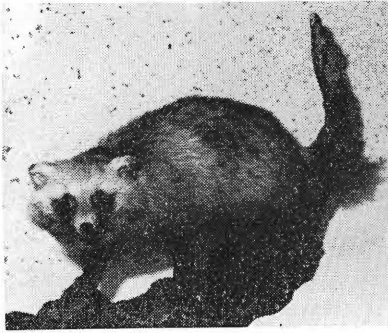
に及ぶ断崖絶壁の老木が生い茂る原始林には、今なおニホンザルがせい息している。このことは自然植生と動物のかかわりの原点を指摘し訴えていると思われる。

四国カルストは、秋吉台・平尾台と並ぶ日本三大カルスト台地に数えられる。北面の猪伏国有林など自然林が多く「面河よりも美しい。」と賞讃された雑木林は、猪伏林道の開通によってその姿を消してしまった。自然界における、植生と動物との深いつながりや影響を考慮し、生態的常態を保つことを心掛けねばならない。村人の知恵のみがそれをなし得るであろう。

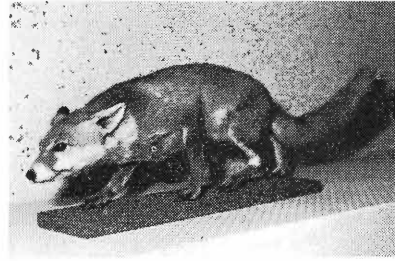
サルといえば九州の高崎山や南予の滑床のサルが有名であるが、中予地方では面河村と柳谷村にのみすむといわれている。このニッポンザルは日本にだけすむサルで、地球上最北限にすむサルであり北海道にはすまない。ボスザルを中心に最も組織だった社会を構成し集団生活を営んでいる。

柳谷キャニオン周辺にすむサルの全容はわかっていないが、ときには三十四匹もの群れが見られるという。黒川下流の柳井川小学校でもサルの群れをよく見かける。川岸の木の実が熟する頃は数匹、十数匹の群れが樹木の枝をゆすりながらおりてくる。減少した児童数を追い越す日が来ることも予想される。

このほか、中津地区や美川村東川、三坂峠付近でも目撃したことがあるが、これらはサル集団を追放された古いザルとも考えられる。



タヌキ



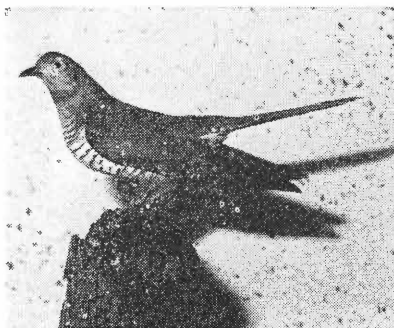
キツネ

イノシシは、植林に追われ、せい息地が減り、残っている村内一帯の落葉樹林域がせい息の中心であり、県境・村境にまたがる山麓を広範囲に活動する。イノシシは元来、一〇〇〇メートル以下の潤葉樹林域を好んですみ、雑食性でヘビ・カニ・山芋・樫の実等を食する。近来イノシシによる農作物の被害についての苦情を聞かず、狩猟解禁中ハンターが捕獲する頭数も極めて少なくなっている。

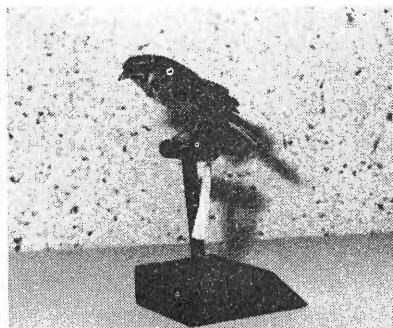
ハクビシンによるイモ・トウキビ・カキ等の被害が多くなり、その増殖ぶりが話題になっている。ハクビシンが日本古来のものか帰化動物が野生化したものかは定説もなく、その習性についてもくわしくはわかっていない。ノウサギやノネズミの天敵として評価される一面、タヌキ・アナグマなどと生態的に似通い、これらが駆逐されるのではないかと心配するむきもある。ハクビシンのせい息地は、深山の渓谷や絶壁等が多く、柳谷村の自然環境はまさにハクビシンの天国かもしれない。

ノウサギ（四国にいたるのはキノウシノウサギ）は夜行性で、木の芽・葉・樹皮・穀物・野菜等を食する。植林したスギ・ヒノキの苗の若芽を食われて被害を受けた記憶は新しい。害獣の代表として厄介ものであったが、キツネ・ハクビシン等が増えたこともあつてか、近年その数はめっきり減ってきた。

キツネやタヌキも夜行性で、日中目にかかることは稀であるが、大川嶺や天狗



ホトトギス



ホホジロ

高原で昼間キツネを見かけたという人もいる。タヌキの方が多く人里近くにすむ関係もあって、子連れタヌキが自動車のヘッドライトにうつし出されることもある。

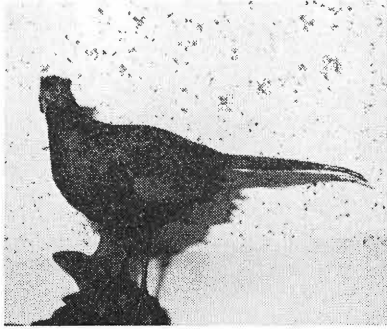
古味の中久保洞穴や、野村町側洞穴では、東北地方特産といわれるウサギウモリ・テングコウモリなど北方系のコウモリが発見されており、洞穴生物の研究上貴重な存在である。

昭和三十七年の総合調査において五段高原では、ホホジロ・ビンズイ・オオリ・セツカ・ウグイス・カッコウ・ホトトギス・ナミエオオアカゲラなどの鳥類が見られたと報告されている。

ウグイスは季節の鳥として親しみ深い鳥である。梅にウグイスといわれるとおり春を告げる鳥である。晩春から夏にかけては山にもどる。少し高い山に登れば、真夏でも練り鍛えた美声を聞かせてくれる。

ホトトギスは、「トツテカケタカ」「テッペンカケタカ」等、地域により鳴声の表現は異なる。「キーキーキキキ」と鳴くモズは、めつきり姿を見せなくなった。

フクロウ（フルツク）は、夜・ネズミなどを捕えて食う猛禽類である。日暮れに「ホーホー」と鳴く声に合わせて、手笛を鳴らすと、近くの樹上に飛来しあたりを飛ぶ姿を見かける。



キ ジ



フクロウ

キジは、野生のものが減少し、猟友会が放鳥していて、村内一帯に残っている雑木林や草地帯にせい息し、時には中津地区の人家周辺の桑畑・茶畑・ミツマタ畑等で見かけることもある。ヤマドリはキジのせい息場所よりやや高地の湿気のある谷間やカヤ場に多い。立野や小村方面でよく見かける。コジユケイは急が増えた鳥で、村内各所の樹間に見ることが出来る。

雑木林が減り、木の実がなくなつて、ヒヨドリ・ツグミなどのわたり鳥はめつきり少なくなつた。

また昔から、「すずめ百までおどり忘れん。」と人間になじまれ、「雀の子そのけそこのけお馬が通る」と親しまれたスズメが、ほとんど姿を見せなくなつた。人家周辺の田畑で、ころころ地べたをころがるように地面を蹴る戯れも、朝まだき、朝露のような湿り気をもつた快活な啼き声の訪ないも、もうとだえてしまった。置き去られるものの虚しさを覚えさせられるあけくれである。

